授業参観による学びの軌跡

参観者の気づき、授業者の工夫をたくさんの人と共有したい

教員はどのような意図で授業を設計し、実施しているのか。授業参観をどのような気持ちで受け入れ、対応したのか。参観者は何を見取り、何に気づき、何を考えたのか。これらを共有するべく、これまでに行ってきた授業参観のうちの10件について、教員のみなさまの協力のもとに、授業参観による学びの軌跡をまとめました。

この記録は、①授業のシラバス、②授業の特徴、③担当教員からの授業設計・運営に関するコメント、④参観者のリフレクティブジャーナルにおける記述の抜粋、⑤授業参観を実施した教員からのコメント、により構成されています。

④の参観者による記述内容については、なるべく参観者の生の声が伝わるよう、あえて手を入れず、文体もそのままに統一することなく掲載しています。⑤の「授業参観を実施してみて」は、「授業参観をさせてください」と依頼が来たとき、正直なところ、どう思いましたか？という問いから始まるインタビューをもとに構成されています。まだ普及しているとは言い難い大学での授業参観を受け入れて下さった教員のみなさんの本音が読み取れます。

それぞれの授業の特徴

本ブックレットで取りあげた10件の授業参観について、それぞれの授業がどういう特徴をもっているかを端的に示すべく、図４にマッピングしてみました。

この図は、「教員による講義形式」と「学生主体のグループワーク」からなる軸、そして、「板書による展開」と「パワーポイントや書画カメラによる資料の提示」による軸を設け、それぞれの授業において、どのような方法が取られているかを大まかに示しています。クラスサイズは、凡例に示す３つのレベルで表しましたが、これは今回対象とした授業における相対的な位置づけであり、一般的な「大規模授業」などを指し示

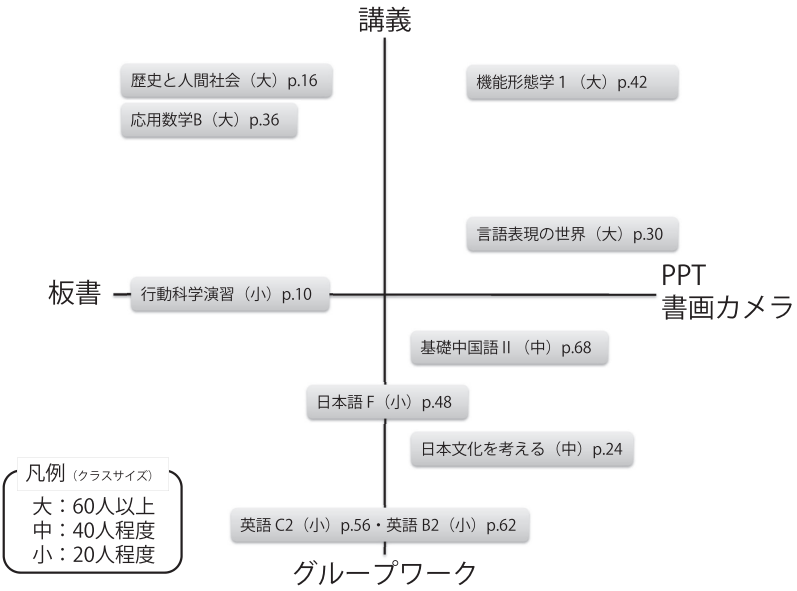


図４：各授業の特徴

しているわけではありません。

今回紹介する授業には、全学教育科目と専門科目の２種類があります。全学教育科目とは、専門教育および大学院教育の基礎を形成するための基盤教育を意味しており、基幹科目、展開科目、共通科目の３科目類から成ります。全学教育の目的や各科目類・科目群の詳細は、「東北大学 全学教育」のウェブサイト（http://www2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/zengaku_kamoku.html）をご参照ください。

コラム① イリノイ大学における授業参観

写真：イリノイ大学の物理学の授業

米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校は、1867年に創立され、卒業生や在籍教員からは20名を超えるノーベル賞受賞者を輩出しており、学部生約32,000人、大学院生約11,000人、教員約2,700人が在籍する有名校のひとつです。工学研究科には、教授・学習の質向上を担う Academy for Excellence in Engineering Education (AE3) という組織が設置されており、新任教員向けプログラムとして Collins Scholars Program を提供しています。本プログラムは、工学研究科の新任教員を対象に、スムーズで生産的なキャリアのスタートを支援するもので、過去に教育の質向上に多大な貢献をした教員 Collins にちなんで名付けられています。一年間にわたり、教育や研究に関するセミナーの受講、ディスカッションへの参加、先輩教員の授業参観、自身の授業に対するコンサルテーション（2回以上）が行われます。

2015年10月、AE3のセンター長、Laura Hahn 先生のご厚意により、今野はこのプログラムへの参与観察の機会を得ました。右上に示した写真は、授業参観の際に撮影したものです。この授業参観は、本プログラムに賛同してくれた先輩教員らの協力のもとに実施しています。もともとイリノイ大学の学生の年齢層が多様であること、教員による講義は大規模サイズで行われるということもあり、若手教員が数名もぐりこんでいたとしても、全く目立たずに学生に溶け込んで参観することができます。参観後には、短い意見交換を行い、それぞれがどんなことに気づいたかを共有します。

授業運営に必要な様々なトピックに関するセミナーを受けつつ、実授業の参観と自身の実践へのアドバイスが受けられる、というプログラムの構造は、東北大学の大学教員準備プログラム、新任教員プログラムと一致する部分が多いといえます。どこの国でも、やはり先輩教員の授業を見るという取組みは、パワフルな学習の機会であることに変わりはないんだと実感しました。

〔授業名〕 行動科学演習「制度の計量分析」

〔授業者〕 永吉希久子（東北大学大学院 文学研究科 准教授）

〔科目群〕 文学部 専門科目　　**〔対象〕** 文学部 ３年次後期

〔授業の目的と概要〕

行動科学の主要な問いは、マクロな社会構造とミクロな個人の行動・意識の関連を明らかにすることにある。マクロからミクロへ、という影響のメカニズムについては、近年の分析手法の発展を受けて、様々な形で実証研究が進められている。この授業では、マクロ要因としての国の政策に注目し、政策が個人の行動や意識に影響するメカニズムについての諸理論を理解するとともに、実際に計量的に分析するための手法を習得し、分析できるようになることを目的としている。授業は三部構成からなる。第一部では、政策が個人の生活・意識に影響するメカニズムについての諸理論を、文献講読によって学ぶ。第二部では、政策の個人への影響について分析するための、分析手法についての知識を、講義／実習形式で学習する。第三部では、関心に合わせて受講生をグループに分け、実際にデータの分析を行い、発表をしてもらう。

〔授業の到達目標〕

(1) 政策が個人の行動・意識に影響するメカニズムについての諸理論を理解し、説明できるようになる。
(2) 政策から個人への影響を分析するための分析手法を習得し、実際に分析できるようになる。

〔授業内容・方法と進度予定〕

第１回　イントロダクション
第２回　理論編１：ポリシー・フィードバックのメカニズム①
第３回　理論編２：ポリシー・フィードバックのメカニズム②
第４回　理論編３：古い制度と新しい制度
第５回　理論編４：制度と規範の関連
第６回　理論編５：制度の制度利用者への影響
第７回　方法編１：クラスター分析とその応用①
第８回　方法編２：クラスター分析とその応用②
第９回　方法編３：マルチレベル分析①
第 10 回　方法編４：マルチレベル分析②
第 11 回　実践編１：班分けとテーマ設定
第 12 回　実践編２：分析と報告の準備
第 13 回　実践編３：分析と報告の準備
第 14 回　実践編４：分析と報告の準備
第 15 回　最終報告会

〔成績評価方法〕

授業への積極的な参加（40%）、最終報告（60%）

〔授業時間外学習〕

理論編においてはテキストを事前に読んでくることが求められる。実践編においては、授業時間外に報告準備が必要となる。

【この授業の特徴】

本授業では、制度が人々の行動･意識に影響するメカニズムについて、それを説明する理論を学ぶとともに、実証的に検証を行うための手法を身に付けることを目的としています。授業は三部構成で、第一部では論文講読により理論を学び、第二部では無料の統計ソフトウェアであるＲを用いた、分析手法についての実習を行います。第三部では、関心に合わせて班を分け、それぞれの班ごとに制度が個人の意識や行動に与える影響について、計量分析による実証を試みてもらいます。第一部の理論編では、事前にテキストを読み、教員が用意した要点整理用のシートを埋めてきてもらいます。そのうえで、授業時間内で内容理解のためのディスカッションを実施するという反転学習の手法を用いています。

【永吉希久子先生から】

専門：社会学、社会意識論、
差別、移民政策

教員が用意したプリントをもとに、事前に要点をまとめてきてもらうというのは、大学の授業らしくないスタイルかもしれません。私がこうした方法を採用しているのは、文系の演習でよくある、各回に担当者を割り振るような授業形式だと、自分の担当回以外は一方的に聞くだけの授業になりがちだからです。この場合、よほどやる気のある学生以外は集中力を保つのが難しく、知識がなかなか身についていないと感じていました。そこで、宿題として全員に課題を出し、それをもとに授業中にディスカッションをすることにより、能動的に授業に関わる時間を多く作ろうと試みたのが、今回の授業構成です（実際にはそれでも知識の定着は難しく、さらなる工夫が必要だと実感しています）。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：観察型

アイスブレークの重要性　（受講生に対して参観者数が多く）一度にたくさんの知らない人が教室に入ってしまったせいか、授業のはじめの頃は、学生たちがわりと静かでした。しかし、永吉先生は平然と微笑みながら授業を進めていきました。先週の授業の復習を踏まえながら適宜学生に質問して答えさせたりしている間、授業の雰囲気が温かくなって学生たちも活発になりました。以前、PFFP のセミナーで「教師は自分の気持ちを管理して授業の雰囲気作りに取り組むことが大事だ」ということを学びましたが、当時はあまり理解できませんでした。今回の授業参観のおかげで、これについて実感することができました。私の担当している授業に、工学部の学生向けの午後の授業があります。工学部の学生は元々語学の勉強に興味が薄く、しかも午後の授業なので、教室の雰囲気がとても冷たかったのです。従って、私はこのクラスの授業がやりにくいと感じ、今まであまりやる気がありませんでした。今日の永吉先生の行いを手本として、次回の授業からでも気持ちを切り替えてアイスブレークに頑張ってみたいと思います。（言語学・研究員）

授業の構成･デザイン　15回の授業は３分割しているとのことであった。前半４回が基本文献を読む理論編、中盤４回は PC を使って統計分析をするという方法論を学ぶ回、後半４回は演習をするとのことである。最終的には、社会調査のデータを使って、時代や地域の背景を踏まえた個人の行動を分析するという実証分析をする。このように、15回の授業を３ ～ ４回ごとのパートに分けて、何を身に付けさせるかを明確にするのは、教師にとっても授業計画が立てやすく、学生にとってもメリハリがあって学習意欲につながるのではないかと感じた。この授業における前半4回の理論編は、まさに、一方的な講義形式になりがちなパートと言える。永吉先生は、予習プリントを配り、基本文献を読むことで穴埋めできるという仕掛けを用意していた。この穴埋め内容をグループで確認した後、全体に発表し、そして教師がコメントするという方法であった。単調な講義形式にならず、学習活動に変化があり、学習意欲の維持

につながっていた。さらに、個人での予習によって、理解できる部分、不明な部分が発生し、知識が活性化される。グループでの確認、教師のコメントによって内容が解釈され、精緻化される。この方法は、理論についての学習方法として取り入れたいと思った。（教育工学・研究員）

板書による授業の利点　今回の授業参観で、私が持っている授業のイメージと特に違うと気付いたことは講師が黒板を使って授業をしていたことである。自分が大学で受けてきた授業も、自分が教員として行う授業も、ほとんどがパワーポイントを使用していた。黒板を使うことで、授業の進行が早すぎて学生がノートをとれないということがなく、学生の発言内容を授業に活かすことができるのでよいのだろうと感じた。また、授業後のディスカッションでは、パワーポイントを使う場合と違い、授業の進行の順番を比較的自由に変更できるという利点があるとの説明を受けた。また、１コマの授業の中で学生が覚えなければならないことが非常に少ないということにも驚いた。言い換えると、授業の進行がとてもゆっくりしていた。しかも、学生は、①予習で教材を読んできて、②グループ内での発表を聞き、③全体での発表を聞き、④教員の最終的な説明を聞く、ということで、少なくとも４回同じ内容を読んだり聞いたりするので、これはさすがに残るものがあるだろうなと思った。我々の授業では、教えなければならない内容（学生が覚えなければならない内容）が非常に多いので、まったく同じ手法をとることは困難であるが、何らかの形で参考にしたいと感じた。また授業後のディスカッションでは、考え方の過程が大切なので、覚えること自体は授業の目的ではないという話を聞き、文系の授業ってこんな感じなんだな…と、自分の分野との違いを感じることができた。（歯学・助教）

毎年違う授業内容　現在の多様な社会を踏まえると、その時代や社会、受講する学生のバックグラウンド、研究テーマ（所属ゼミ）、興味の対象、留学生比率や出身などを総合的に判断して授業内容を練ることは極めて重要である。これを言い換えると、毎年授業内容を変える必要があると

いうことになる。しかしこれは負担が大きすぎて普通は出来ない。しかしながら上手くいけば、その授業へ取り組む学生の姿勢を劇的に変えられると思う。全員が演習できるようにと、学生視点で考えて毎年違う授業内容を提供していることを聞き、とても素晴らしく感じた。（医工学・大学院生）

自分がしていて楽しい授業　永吉先生は、「自分がしていて楽しい授業をする」とおっしゃっていた。正に原点である、と思った。これがあるから、自分は聴講していてアクティブな授業のように感じたのだと思う。さらに単純に考えると、つまらなそうに授業をしている先生の授業はつまらなく、楽しそうに授業をしている先生の授業は楽しいのである。授業という生き物を扱っている以上、常にインタラクティブな情報のやり取りを心掛けなければならないと思った。（医工学・大学院生）

授業に完成はない　永吉先生は学生の反応を見ながら、毎年様々な授業の工夫をされており、その姿勢が大変素晴らしいと思った。「授業には完成がない。これで完璧と思ってはいけない」とおっしゃっていたが、本当にその通りだと思う。ついつい一度満足してしまうとこのままでよいと思いがちだが、そうではないと改めて思った。毎年、学生の様子は異なるので、去年良かったことが今年も良いとは限らない。常によりよい授業を目指す姿勢に大変感銘を受けた。私も永吉先生のように成長し続ける教員でありたいと思った。（日本語教育学・助教）

【授業参観を実施してみて（永吉希久子先生より）】

正直にいえば、私にとって授業参観は、非常に有益であると同時に、辛い経験でもあります。授業は研究以上に難しく、なかなか胸を張れるレベルには到達しません。それを人に見せて、（それが趣旨ではないにせよ）評価を受けることは、心理的な負担にもなります。それでも私が授業参観を引き受けるのは、十分なメリットがそこにあるからです。

授業参観に来てくれる方々は、研究分野が違うだけでなく、出身大学も異なり、それまで受けてきた教育が多様です。だからこそ、まったく違う視点からのコメントがもらえます。受講生は何か不満があっても伝えにくかったり、あるいは受講生と教員の双方に「授業はこんなもの」という思い込みがあったりして、よりよい授業の可能性に気づけなかったりします。

例えば、制限時間をこちらから設けず、グループごとのディスカッションを行っていたことがありました。その授業の参観後のコメントで、あらかじめ制限時間を設けたほうが、その中で配分しながら話し合えるので効率的だというものがありました。私にとって、授業の中でディスカッションを取り入れる意味は、授業内容の理解を深めることしかありませんでした。このコメントは、それを超えて、一般的なディスカッションのスキルの向上にもつながりうるということに気づかせてくれました。

さらに、授業参観は自分の授業の在り方について振り返る機会にもなっています。恥ずかしながら、日々の授業準備に追われ、授業の在り方そのものについて考える時間はほとんどとれずにいます。それでも、授業参観での質疑を通して、「なぜこのような評価基準を設けているのか」、「板書とパワーポイントはどちらがいいのか」などと振り返ることで、「本当に今のやり方がいいのか」を自分に問うことができます。授業には完成はないことを思い返す機会が得られることは、授業参観の大きなメリットだといえます。

〔授業名〕 **歴史と人間社会「近代イギリス経済の形成とスペイン・オランダ」**

〔授業者〕 関内 隆（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授［当時］）

〔科目群〕 全学教育科目 基幹科目―社会論　〔対象〕 文系理医農 1年次後期

〔授業の目的と概要〕

15～17 世紀のヨーロッパ世界では、大航海時代以来の各国興亡史が展開した。大航海時代の機に乗じたスペインとポルトガル、17 世紀の世界経済を支配したオランダと 18 世紀におけるイギリスの台頭である。授業ではこれらの歴史的な源流を探るために中世以来のイギリス経済に特に焦点を当て、封建社会の中での市場経済の発展と絶対主義経済の形成に注目しつつ、経済的な興亡史を考察する。

〔授業の到達目標〕

・中世経済から近代経済への歴史的な移行プロセスと市場経済との関係を説明できる。
・イギリス中世経済の展開において市場経済が果たした歴史的役割を説明できる。
・15 世紀前後の近代イギリス社会経済の形成過程を把握し、その歴史的な特質を論述できる。
・16～17 世紀におけるイギリス国内の社会経済編成とその歴史的展開を論述できる。
・16 世紀以降の大航海時代と商業革命の歴史的意義について論述できる。
・スペイン、オランダの経済的盛衰とその歴史的背景を論述できる。

〔授業内容・方法と進度予定〕

1. 中世経済から近代経済へ
2. イギリス封建社会の展開と市場経済
3. 15 世紀におけるイギリス絶対主義の形成
4. イギリス絶対主義の基本構造と市民革命の経済的な意義
5. 大航海時代と商業革命の歴史的な意義
6. スペイン経済、オランダ経済の盛衰とその背景

〔教科書および参考書〕

(1) 『新版 西洋経済史』石坂昭雄ほか（1993）有斐閣、参考書

〔成績評価方法〕

期末筆記試験あるいは分割レポート（60%）とミニットペーパー※2 による授業参加への積極的な取組み度（40%）に基づいて評価する。

〔授業時間外学習〕

ミニットペーパーによる対話形式を取り入れるので、授業への積極的な取組み姿勢を期待する。また、質問や要望などは常時メールで受け付ける。

※2 東北大学の全学教育で活用されているコメントシート。記述式とマークシート式があり、学生からのコメントの収集や小テストなどに活用されています。東北大学 全学教育ウェブサイトにて詳細が解説されています。
http://www2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/zengaku_mp.html

【この授業の特徴】

本授業は、教員による板書を軸に展開される講義形式の授業です。履修生は100名程度（2015年後期）と比較的大人数クラスです。毎回の授業の最後にはミニットペーパーを利用し、今回の講義のまとめと質問を学生に書いてもらうだけでなく、次回の講義内容につながるようなクイズを出題しています。この回答内容は学生の予備知識やニーズの把握に利用するとともに、ユニークなものをピックアップして次回の授業の前半でクラス全体に紹介しています。成績評価においては、期末試験か分割レポート（出題される３つのテーマについてセメスター中に２ないし３回に分割して執筆する）のどちらかを学生自身が選択して取組むことができるようにしています。

【関内隆先生から】

専門：イギリス近代史、社会経済史

この授業では、必ずしも高校の世界史を履修していることを求めないと学生には伝えています。ただし、場合によっては知らない歴史用語などが出てくることもあるので、そのあたりは大学生の自覚を持って授業外学習として、自分で意識的に調べて取組むように、と伝えています。基本的な基礎知識は、中学で勉強する近代の世界史が前提になっています。

一生懸命何かを暗記することを、この授業では全く要求していません。歴史を勉強する中で「なぜ」という問いを学生自ら発する習慣をつけてもらうのが目標です。レジュメを敢えて渡さずに板書中心の進め方を取っているのも学生が歴史の因果関係などについて教員とともに考えをめぐらすことを目指しているからです。そして、学生が質問し易くなるように間合いを取りながら進めています。毎回、授業内容を学生自身がミニットペーパーにま

とめる作業を課していますが、90分程の授業内容についてそのポイントを短い文章にまとめる訓練になったとの声が特に理系学生から聞かれます。

15回の授業にできるだけ連続性をもたせるために、授業の終わりにはクイズを出題して、次の授業で扱う内容の推論、予測に取り組ませることにしているのが特徴的な工夫だと思います。この授業は10学部の学生を対象とする全学教育「基幹科目」（選択必修科目）のひとつですので、学生が各専攻に即していろんな授業を履修している中で、教養教育としてのこの授業への興味関心を絶やさずに、次回の授業も聞いてみよう、楽しみに期待しようという意識を持ってもらいたい、というのがねらいです。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：観察型

高校教育から大学教育へ　学生とのいわば不幸な出会いをなくすために、関内先生は授業の第１回目で「興味関心のある人だけ来てください」「歴史の裏話などは話しません。経済史なので抽象的な話をします」とおっしゃるという。そうしてもともとテーマに対する興味があってやってきた学生にとっては、関内先生の授業は非常にやりがいがあるのではないかと感じた。中世から近世への移行や絶対王政、テューダー朝の誕生などはおそらく高校の世界史で習った内容だと思う。しかしそれを暗記しなければならない単なる事実としてではなく、背後に経済的メカニズムが潜んでいた歴史の流れとして、抽象度をあげて教えてもらえることは、高校の世界史を一段引き上げる内容であり、高校教育から大学における専門的な教育への橋渡しとして理想的なのかもしれない。わたしの専門は社会学なので、これまで高校教育との接合を意識したことはなかったのだが、高校の倫理や現代社会を引き上げる内容として授業を組み立てることは、とくに一般教養の科目としてはひとつの戦略になりうるのかもしれないとも感じた。（社会学・大学院生）

全学教育としての授業のあり方　学生の予備知識に必要以上に拘泥せず、受講している学生全員に必ず教えたいこと、時間があったら教えたいこと、より専門的に学習したい学生に教えることなどを、学部生というレベルや全学教育という位置付けなどの点から考慮されていることから、このような視点で自分の授業内容を整理し、検討する必要性を強く感じた。自分の専門分野の特徴を踏まえて、学生の関心と知識とを結びつける方法を学び、考案していかなければならないだろう。加えて、オリエンテーションにおいて、シラバスに記載されている学習の到達目標や歴史を学ぶことの意義などを、受講する学生によく確認しているという話を聞き、改めてオリエンテーションの重要性について認識した。学生へのフィードバックについても色々な方法があることが分かった。どのようなオリエンテーション、またはフィードバックを行うかということについても念頭に置いて授業を構想していく必要があるだろう。（法学・大学院生）

板書による授業　講義は板書を利用する形式で行われ、見学した回次では資料の配布はなかった。その代わり、授業進行のペースはそれほど速くはなく、一つ一つの事項を丁寧に教えているように見受けられた。多くの知識を一度に伝えるのではなく、このようにじっくりと進める場合には、レジュメ配布やパワーポイントではなく板書を利用する講義が適しているように思われる。また、講義の冒頭で当日の講義の理解到達目標と講義の進行の流れが説明されていた。学生にとっては、どの点に特に集中すべきかが事前に分かるというメリットがある。板書では、図や表が用いられ、学生に対して「大きく書いてください」とノートを取る際のレイアウトの指示があった。図はやや複雑であり、学生は板書を書き写しながら解説を記入していくことに慣れていかなくてはならない。（法学・大学院生）

成績評価における工夫　成績評価について特徴的だったのは、ミニットペーパーの使用と分割レポートという仕組みである。ミニットペーパー

は終了15分前をまわってから配布され、当日の講義内容のまとめと次回につなげるためのクイズの回答の記述が指示された。私が学生なら冒頭で述べられた理解到達目標を中心にまとめを記述するだろう。また、そのように指示すれば、学んでほしいポイント（重要事項）に学生の集中力を二重に向けさせることができる。クイズの回答については各回の冒頭で学籍番号を付して紹介するとのことであり、また、学生からの質問の際にも「よい質問だ」と返すようにしているとのことであった。学生にとっては大きな刺激になると思う。ミニットペーパーは4段階で評価するとのことであった。分割レポートは学期末試験との選択式で、３回中少なくとも２回提出する分割レポートを選択する学生が大半であるとのことだった。学生にとっては学期末の試験勉強を減らせるというメリットがある。教員からすれば、学習を学期末（最悪一夜漬けになってしまう）だけではなく学期中にも継続して自主学習させることができるというメリットもあるだろう。（法学・大学院生）

質問させる工夫　要所ごとに学生に対して質問が出されたり、十分に理解しているかの確認がなされており、講義中の「分からなかった点をもう一度説明してほしい」という学生からの発言があったことには驚いた。こうした質問は、ためらったり恥ずかしいと感じたりしてなかなかできないものである。関内先生は、一度質問が出ると、学生はどんどん質問を出すようになるとおっしゃっていた。質問が出やすいようするには、まずは答えやすい質問から始めていくという工夫ができるだろう。また、終了後の質疑応答の際に興味深かったのは、「20分続けて話すと話し過ぎだと感じる」と関内先生がおっしゃっていた点である。20分を回らないうちにいったん説明を切って質問・確認をする時間を設けるというのは、学生の集中力の継続という点からも、有効かもしれない。（法学・大学院生）

学生への呼びかけの工夫　関内先生の授業で印象的だったのは、関内先生がシグナルとなる言葉を学生に対してたくさん発していたことだっ

た。「またあとで詳しく説明しますので、今日は皆さんに絶対主義のイメージだけを持ってもらいたい」「ここからは本論に入りますけれど」「これは復習です」「〇〇が今日これからの話題です」「誤解のないようにしてください」など、これから話す内容は授業全体のなかでどこに位置づくのか、学生にどんな態度で臨んでもらいたいのかといったことを伝える言葉である。学生にとっては、呼びかけられることで授業への集中が深まるうえに何を望まれているかがわかるので、効果的だと思った。（社会学・大学院生）

歴史学への姿勢　関内先生の授業は、以前から受けたかったがこれまで必修の授業と被っていたため出席できなかったので、とても楽しみにしていたが、やはり面白かった。中でも歴史を教えるための様々なヒントを得ることが出来て良かった。ただ研究発表のように正確さにのみ固執するのではなく、「授業としての分かりやすさ」を学生の層によっては自分も意識すべきだと思った。「歴史学を知る＝イメージ力が大事」や「歴史は異文化体験だ」など、関内先生独自の歴史学への姿勢をも知ることができてよかった。自分も、学生に「何を、どのようなスタンスで伝えたいのか」を見直せば、もっと授業への熱意と面白味が増すのでは？と思った。「自分が行っている授業はこれまで自分が受けてきた授業に似ている」という先生方の言葉も印象的だった。自分も、高校・大学の先生の授業方法も意識しているところがある。ただ、情報が古い可能性もある。「大学の教育＝（大学）文化の教育」という言葉も印象的だった 。（比較文化学・大学院生）

【授業参観を実施してみて（関内隆先生より）】

他の人に授業を見せたことがなかったので、初めて授業参観をお受けした時は若干のプレッシャーを感じました。講義形式の授業の場合、教員が一人で全て行っているので、他の人から意見をもらったりすることがありませんよね。だからこそ、自分の授業に対してコメントをもらってみたいという期待感もありました。

受講生が100人もいたので、数名の参観者が後ろに座って見ていても気が付いていなかったと思います。普段通りの授業を参観してもらえたのではないでしょうか。最初の５分くらいは私も緊張して意識しながら進めていましたが、その後は参観されていることもすっかり忘れてしまっていたと思います。

授業後のディスカッションでは、自分は気が付かなかったことを指摘してもらえましたし、この授業の特徴を言い表してもらえたのがよかったです。自分でも持っている授業のイメージや構成について、参観者からの指摘を受けて改めて考えることで、確認ができたな、という実感があります。全学教育で、受講生が多様な分野から集う性質の授業ですので、様々な専門分野の参観者に教養教育としての授業の中身についていろいろと指摘をしてもらえたのは有意義でした。また、結構褒めていただいたので、率直に言えば自分の自信につながったというか、自分がやっていたことは間違いなかったのだな、ということを確認できました。非常によかったと思っています。

コラム② 授業参観時の視点

大学教員準備プログラム・新任教員プログラムでは、シラバス作成ワークショップ、教授・学習に関するセミナーなどに加えて、マイクロティーチング（短時間の実験授業）など授業実践のトレーニングの機会も提供しています。これらの取組みを通じて、各参加者が自分なりの「授業を観察する視点」を設定することを想定しています。したがって授業参観時には、「教員がとる教授手法、教具の使い方、時間配分、学生への指示の出し方、学生の取組みの様子などから、自身の課題意識に応じて参観のポイントを設けること」という大まかな指示以外には、特に固定した参観の視点などを提示することはしていません。

「先日プログラムで実施したマイクロティーチングでの経験を踏まえて授業参観をすると、全然気づくポイントが違う！授業の見え方が変わった！」―ある授業参観後、参加者が興奮した様子でこう伝えてくれました。特に、まだ授業経験のない参加者にとっては、マイクロティーチングの実践を通して、授業を設計、実施し、フィードバックをもらう、という経験をすることで、授業実践に関する様々な要素へ着目する力が格段に養われるようです。「今まで、教員がどこから板書を始めて、どのくらいの文をどの程度の大きさで書くのか、話しながら書くのか、話し終えて書くのかなど、気にしたことはなかった。マイクロティーチングで自分の板書の方法についていろいろと意見をもらった後で授業参観をすると、それぞれの教員がどんな工夫をしているか見取ろうとする視点が生まれていて、マイクロティーチング前と、まったく見え方が違う！」プログラムのコンセプトのひとつである「比較の視点を養う」という要素が着実に参加者の学びを後押ししている様子を感じた出来事でした。

授業参観も重要ですが、実践の経験と組み合わせることで、より効果が高まることを実感しています。

〔授業名〕	**日本文化を考える「【展開ゼミ】コミュニケーションの諸相―国際共修ゼミ―」**		
〔授業者〕	佐藤勢紀子（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授）		
〔科目群〕	全学教育科目 展開科目―カレントトピックス 外国人留学生等 特別課程 上級日本文化演習	〔対象〕	全学部 1 年次後期

〔授業の目的と概要〕

日本人学生と外国人留学生がともに日本語の用法や日本でのコミュニケーションの仕方について意見交換を行なうことを通じて、日本文化を複眼的に捉えると同時に、世界の多様な文化についての知見を深める。

〔授業の到達目標〕

1. 日本文化を考察することによって、自己の出身文化圏の文化（日本人の場合は日本文化）を新しい視点から見直すことができるようになる。
2. 異なる言語・文化圏を背景とする者同士が、それぞれのコミュニケーション・スタイルの違いを認識し、互いに配慮しつつ交流できるようになる。

〔授業内容・方法と進度予定〕

テキストとして、教科書を中心に、日本語や日本文化について書かれたいくつかの論説文を選んで読む。4～6 人程度のグループに分かれ、グループごとに交替で発表する。発表担当グループは、テキストの担当部分の要旨を紹介し、テキストの記述内容に関する実例およびコメント（感想、意見、疑問など）を提示する。それをもとに、グループで、あるいはクラス全体で、意見交換を行なう。1 人の学生が学期中に発表する機会は 2 回になる見込みである。また、毎回授業についての短い感想、意見、質問等をコメント・シートに記入して提出する。次週にその内容をクラスで共有し、発展的な意見交換を行なう。

第 1 回　ガイダンス(1)　授業全体の内容、テキスト、スケジュールについての説明
第 2 回　ガイダンス(2) 発表の仕方についての説明、グループ分け、アイスブレーキング
第 3 回　グループ・ワーク（発表の準備）
第 4～9 回　1 ラウンドの発表および意見交換
　メイン・テキストから 12 トピックを選び、1 回に 2 つずつ取り上げる。
　（例）「なに」、「ていうか」、「やっぱり」、「ね」と「よ」、「やる」と「もらう」、など
第 10 回　グループ・ワーク（発表の準備）
第 11～14 回　第 2 ラウンドの発表および意見交換
　サブ・テキストから 8 トピックを選び、1 回に 2 つずつ取り上げる。
　（例）あいさつ、人称、役割語、ジェンダー、方言、配慮表現、非言語コミュニケーション
第 15 回　まとめ
※学期中に 2 回、大学教職員や短期研修の留学生を招いてのゲスト参加の授業を行なう予定である。

〔成績評価方法〕

平常点および期末レポートにより評価。平常点は出席、発表、クラス活動への参加によって付ける。

〔教科書〕

(1) 『ていうか、やっぱり日本語だよね。―会話に潜む日本人の気持ち―』泉子.K.メイナード（2009）大修館書店、教科書

〔授業時間外学習〕

第 1 ラウンド、第 2 ラウンドそれぞれのグループのメンバーとともに 2 回の発表の準備を行なう。発表と意見交換で取り上げるテキストを事前に読んで、内容をきちんと把握しておく。

【この授業の特徴】

本授業では、日本人学生と留学生が協働でグループワークを通して学びあいます。履修生は47名（2016年度後期）。15回の授業の中で２回のグループ発表が課せられており、学生がそれぞれ興味のあるトピックを選び、同じ興味を持つ学生とグループを組み（１回目は４人組12グループ、２回目は６人組８グループ）、調べて発表します。教員と学生との往復書簡的役割を持つコメント・シートを介したやり取りがあり、ユニークな意見や質問は、次の授業の冒頭で取り上げて議論します。教科書と配布資料等を適時、書画カメラでスクリーンに投影しながら解説や議論を行います。授業参観時には、参観者は教室後方から見学するのではなく、各グループに参加し、実際に学生とのディスカッションを体験します。

【佐藤勢紀子先生から】

専門：日本思想史、日本文学、日本語教育

国際共修ゼミ、ということで日本人学生と外国人留学生の教えあい、学びあいを大切にした授業です。履修希望者が多いため、第1回の授業で希望理由などを提出してもらい、選考を行って人数のバランスをとっています。

この授業での教員の役割は「お膳立てをすること」です。教員からだけではなく、多様なバックグラウンドを持つ学習者同士で学びあうことによる気づきを大切にしたいと考えています。グループワークは学生も楽しんで取組んでいるようで、たまに教員が話す時間が長くなってしまい、学生同士の活動の時間が減ってしまったりすると、クレームが出てしまうほどです。学期の初めに時間をかけてアイスブレークを行うのですが、そこで育まれる雰囲気が授業全体の活動の活性度に影響していると感じています。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：参加型

授業を活気づける工夫　本授業ではコミュニケーションをテーマに、日本人学生と海外からの留学生とが一緒に6 ～ 7人のグループに分かれてゼミ形式で学んでいた。学部も国籍も多岐にわたっていたが、コミュニケーションの分野に対して関心を持つ学生がほとんどであり、授業に熱心に取り組んでいた。例えば、指定された教科書や参考書が多く、学生へのフィードバックを通してさらに文献を紹介するなど、学生の熱心さに応えるような教員側の姿勢や工夫について多くを学ぶことができた。呼ばれたい名前を学生自身が指定できたり、日本人と留学生の分布が偏らないようなグループの編成をしたり、文化の違いに焦点を当てた質問の提示や指名をしたりするなど、コミュニケーションを円滑にし、授業を活気づかせるための工夫も見られた。グループディスカッションの際に、佐藤先生が積極的に机間巡視をしながら、各グループの話を聞き、時に促し、最後に全体に発表させるという点は、多様な意見に触れる機会をさらに提供すると同時に、学生に授業へコミットしているという意識を作り出し、またディスカッションがだれるのを防止することもできるので良いと思った。佐藤先生の学生の指名の仕方や質疑応答、コメントの仕方が丁寧で、それぞれの学生のことをよく見ていることが感じられた。（法学・大学院生）

コメント・シートの工夫　佐藤先生が使用されていたコメント・シートはよいアイデアであると感じた。理系科目の場合、授業ノートを回収されてしまうと困ってしまうが、かといってミニットペーパーだけを何枚も重ねたファイルは、管理するのも授業に持ってくるのもやや面倒かもしれない。また、資料が大きいと学生が後で読み返さないかもしれないという危惧もある。その点、このコメント・シートのようなシステムであれば、大きい一枚の紙でコメント及び発表に対する評価ができ、紙一枚だけなので学生も振り返って見るかもしれない。少人数であれば、返信欄をつけて学生とコミュニケーションすることもできる。形に残るもので学習の達成感を感じさせるという観点からは、小学校の通信簿のよ

うにきれいな厚紙で作ってもいいかもしれない。アクティブラーニングを主体とする授業において頭を悩ませる点の一つが成績の評価であると思う。コメント・シートには各グループのプレゼンに対する意見が書かれていることが多いと伺った。これは、学生の発表を教員の主観だけでなく、聴衆の目線も含めて客観的に評価できるということにつながるので、アクティブラーニングが多い授業でこそ、このような学生からのフィードバックを随時得る仕組みは必要であると感じた。(天文学・助教)

学生へのフィードバック　佐藤先生は、大変丁寧に準備をなさった上で授業に臨んでいらっしゃった。たとえば、コメント・シートの記述内容をまとめられた資料を拝見して、驚いた。あの資料を作成するだけでも、大変な時間を要するだろう。そればかりか、先生は受講生それぞれのコメント・シートに対して、一枚一枚丁寧な文字で御返事をされていた。これには、いっそう大変な時間がかかるにちがいない。なお、あるタイ人留学生が「先生から返ってくる御返事が毎週楽しみ」と語っていた。教室のムードがとても良い理由の一つが、ここにあるように感じた。(日本語教育学・准教授)

教員の口調や雰囲気　グループワークやディスカッションに興味があり、今後自分もやることになるだろうと思っていたので、とても参考になった。「学生が主体」であるため、先生も「教える」というというよりも、口調や表情、仕草もとても穏やかで学生の意見を肯定するような動きのほうが多いのが印象的だった。先生のキャラクターでもあるかとも思うけども、「答えやまとまりがいつもある必要はない」からこそ、学生たちの間に穏やかに「考えるきっかけ」を植え付けている様子が、これまでに見られないやり方で、実に興味深かった。講義形式と、グループワーク形式である時は、自分も口調や授業展開に気を配ってみたい。(比較文化学・大学院生)

教員の授業中の態度　学生は教員の授業中の態度に敏感なものである

が、今回の授業に参加して改めてそのことを実感した。教員が教授内容についてどう思っているかということだけでなく、学生のことをどのように考えているかということも、授業デザインや授業中の教員の姿勢から学生は感じ取り、それが学生の授業態度に影響するのだろう。この点を踏まえて、授業中の態度についてもよく考え、心得ておきたい。（法学・大学院生）

教員の役割　このクラスは11か国の留学生が履修している。多様なバックグラウンドを持った学生とディスカッションをしたり、一緒にプレゼンをしたりする機会は、日本人学生にとっても留学生にとっても大変良い機会であると感じた。私のグループでも、時折留学生の学生が隣の日本人学生に、佐藤先生の話の内容について質問をしていた。このような教え合い、学びあいが自然に起こっていて大変素晴らしいと思った。この授業では、学生が主体的に学ぶことが重視され、ディスカッションや発表を中心に構成されている。授業後のディスカッションでも、佐藤先生がおっしゃっていたが、教員の役割は、おぜん立てをすることである。授業中、日本人学生や留学の発言に間違いがあっても、修正や補足は必要最低限にし、できる限り学生が話せるようにしていたのがとても印象的だった。また、できるだけ多様な人とできるだけ多く話せるようにグループ分けをしているとのことだった。ディスカッションの内容を聞いていると、鋭い指摘やいい気づきがたくさんあり、私もいつかこんな授業をしてみたいなぁ…と本当に思った。日本語のあいづちの特徴について、一人の教員が説明するよりも、学生同士でディスカッションを通して様々な気づきを得ることの方が、学びが大きいと思った。（日本語教育学・助教）

【授業参観を実施してみて（佐藤勢紀子先生より）】

ただ見学するのではなく、教員として授業をどのようにやっていくかを勉強するために参観されるということで、「ちゃんとやらなきゃいけない」という気持ち、負担感は多少あります。普段から日本語教育に関心がある方や海外からの訪問客が授業見学に来ることには慣れてはいるのですが、この授業参観では様々な専門分野の教員や学生さんが見に来られるので、私のこの授業が役に立つのかなという意味での心配も少なからずありました。

参観してもらうにあたっては、後ろの方でただ授業を見るのではなく、学生のグループワークに入って体験していただくことにしています。この方法は、学生からも好評で、学びの面でもプラスになっていることが感じられ、むしろありがたいと思っています。いつものメンバー以外の新しい顔ぶれが授業に参加することで、学生は新鮮さも感じているようです。そういう点では、授業参観は私の授業運営にプラスになるとも思っています。

参観者とのディスカッションの時間も好きです。多様なバックグラウンドの参加者とのやりとりの中で、こういうところが珍しいんだ、ここが疑問なんだ、というような自分でも気が付いてないようなことを指摘してもらえるのはありがたいです。参観者の中に、私の授業の時間配分を計測してくださった方がいて、それを見て、前回の授業の振り返りが長過ぎたということがよくわかりました。いつも極力短く、と思っていて、だいぶ改善されたのですが、油断するとついしゃべりすぎてしまうようです。この件もリフレクティブジャーナルでコメントをいただいたことにより、実際の授業改善につながりました。自分でも意識していなかったようなところを意識するきっかけになる貴重な機会をいただけました。また、参観者のみなさんは、それぞれ独自の視点から私の授業を見て、褒めてくださることもあります。普段から意識せず何気なくやっていることを褒めてもらえると、自信につながります。

〔授業名〕 言語表現の世界「コミュニケーション&プレゼンテーション」

〔授業者〕 邑本俊亮（東北大学 災害科学国際研究所 教授）

〔科目群〕 全学教育科目 基幹科目―人間論　〔対象〕 医歯薬工 1年次後期

〔授業の目的と概要〕

この授業では、心理学をベースにコミュニケーションとプレゼンテーションの基礎と応用を学びます。私たちはふだん、あたりまえのように相手が発した情報を理解し、あたりまえのように自分の考えを表現して相手とコミュニケーションを行っています。しかし、そこには私たち人間のきわめて高度な心理メカニズムが働いています。また、コミュニケーションはどんな場面でもうまくゆくとは限りません。その成否はさまざまな要因に左右されます。その要因の１つが、情報の送り手のプレゼンテーション能力です。自分の考えを正確に、そして効果的に他者に伝える能力。それはみなさんの今後の人生において、ますます重要なものとなっていくでしょう。この授業を通して、そのような能力を向上させるためのヒントを獲得してもらえれば幸いです。

〔授業の到達目標〕

(1) 人と人とのコミュニケーションに関する心理学的知識を獲得し、日常生活の中で思い出したり活かしたりできるようになる。
(2) 実社会で役立つプレゼンテーション能力（とくに言語表現力）を向上させるためのきっかけをつかむ。

〔授業内容・方法と進度予定〕

第１回　オリエンテーション
第２回　言葉で伝えることのむずかしさ
第３回　非言語コミュニケーション（１）
第４回　非言語コミュニケーション（２）
第５回　人間関係とコミュニケーション
第６回　誤解を語ろう
（グループワークとプレゼン大会）
第７回　言語理解の心理メカニズム
第８回　良い文章を書くために
第９回　悪文から学ぶ
（個人ワークとグループワーク）
第 10 回　悪文から学ぶ（解説と補足講義）
第 11 回　相手があってのコミュニケーション
第 12 回　ビジネスコミュニケーション
第 13 回　ビジュアルコミュニケーション
第 14 回　コミュニケーションクイズ大会
第 15 回　言葉と心とコミュニケーション

〔教科書および参考書〕

(1) 『言語心理学入門　言語力を育てる』福田由紀（2012）培風館，参考書
(2) 『コミュニケーション論をつかむ』辻大介・是永論・関谷直也（2014）有斐閣，参考書
(3) 『非言語行動の心理学　対人関係とコミュニケーション理解のために』V・P・リッチモンド・J・C・マクロスキー（2006）北大路書房，参考書

〔成績評価方法〕

毎回の授業内提出物（50%）、３～４回の授業外提出課題（40%）、個人ワークやグループワークの遂行状況（10%）によって評価します。

〔授業時間外学習〕

授業外提出課題は十分に時間をかけて準備・提出してください。

【この授業の特徴】

毎回、授業の開始時に、本日の授業概要とコメント欄が設けられたペーパーが配付され、授業後に回収されます。学生はこのペーパーにノートをとり、授業内容を自分自身と関連させたコメントを記述することが求められます。授業中のところどころで、関連する短いビデオ映像が流され、学生の興味を維持し、理解を深めさせる工夫がなされています。講義型の授業ですが、グループワークやペアワークも数回実施され、学生が主体的な活動を行う機会も設けられています。クリッカーを用いたクイズ大会も行われます。最終回には、毎回提出したペーパーが個人ごとに綴られて、返却されます。

セメスターを通じて３つのレポートが課され、それらはすべて授業展開と連動するものとなっています。１回目のレポート課題に対しては、各自の提出後、その内容についてグループでのディスカッションとプレゼンテーションへと発展します。２回目のレポート課題はある条件を満たす文章を創作するもので、教員側で優秀な作品（全体の３割程度）が選ばれ、小冊子にして配布されます。３回目のレポート課題は、各自がその小冊子を読み、優秀作品トップ３を選んでその理由を評価文として記述するものです。これによってクラス全体でのベスト作品が決まります。

【邑本俊亮先生から】

専門：認知心理学、教育心理学

モットーは、楽しく、わかりやすく、ためになる授業です。学生の目線で授業づくりをしています。若い頃は１コマの授業をどうするかに悪戦苦闘。最近ではセメスターを通じた学習支援のしかけをあれこれ考えています。学生がこの授業を履修してよかったと思える授業づくりを追求しています。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：観察型

オリエンテーションの意義　邑本先生は授業前に、オリエンテーションで説明した講義を受ける際の決まり事、禁止事項などを配布していた。私自身も学生時代に受けた講義で同様の資料をもらったことが何回かある。毎回その資料に目を通すたびに緊張し、講義を受けていた思い出がある。今回の講義では「決まり事資料」が手元にある緊張感と相反して授業中は和やかな雰囲気であった。邑本先生は、授業を受ける態度やマナーなどはあまり授業中に注意をしないとおっしゃっていた。よく他の先輩先生方にも「メリハリだよね」と言われるが、「メリハリってこのことか」と目の前の学生たちの態度や反応を見て実感し、自分の指導時にもオリエンテーションを有効に活用するヒントを得られる体験だった。（医学・助手）

工夫とそのタイミング　身の振舞い方、話し方、動画の用い方、クイズ形式の用い方、簡易なゲームの用い方、全てが凝縮されていた。先生自身は、意識して用いていないとのことであったが、実に効果的なタイミングで、ひとつひとつの工夫が用いられていたように思う。工夫を用いるにもタイミングが重要であると思った。邑本先生は、“今どきの学生の関心”を考慮していると話されていた。“今どきの学生の関心”は常に絶え間なく変化する。それをキャッチして、対応できる柔軟性が、授業の導入部分には必要であることが理解できた。クラスのサイズの限界、授業内容・学問分野によっても工夫の仕方は異なる。（医学・大学院生）

学生の集中力　最大の収穫だと思ったことは、学生の集中力についてであった。最後列から学生達の様子を観察していてわかったことは、「多数の学生はずっと集中しているわけではない」ということである。邑本先生は、単に学生が興味を持ちそうなビデオや実験を見せ続けているわけではなく、関連する心理学の用語などの説明や研究の紹介をしっかり行っていた。こうした時間があると、多数の学生は集中が切れてくる。これは一般教養の授業では避けられないことでもあると思う。だからと

いって、もろもろの説明や解説の時間を省いて、学生の興味を引きそうなことばかり授業に盛り込むのは間違いだと思う。重要なのは、学生の集中力が切れても早い段階で再び授業に引き戻していくことである。「90分間集中し続けてもらう」と考えるのではなく、「飽きていた時間があっても、要所要所でしっかり集中させ、トータルでおもしろい授業であったと感じてもらえる」ことが、よい授業の内実なのだということに気がついた。これはとても大きな収穫であり、今後自分の授業を作っていくうえでも重要な考え方だと思った。（社会学・助教）

理解のプロセスに沿った流れ　私が一番感動したのは、90分があっという間であったことだ。いつもの私の英語の授業では学生が「まだかまだか」と教室の前にかかっている大きな時計をちらちらと見ていることが多い。どうして90分があっという間だったか。それは、「理解の認知プロセス」に従って、学習者に無理なく順序良く区切りよく情報が提供されていたからであろう。最初に「〇〇の状況で人はどういうふうに動くだろうか」などの問題提起があり、テーマについて紹介する。そして自分の日常について思い起こし、既有知識を掘り起こす機会を与える。さらにいくつかの事例を紹介し、最後にもう一度テーマをまとめるといった具合に授業は進んでいく。自分も含め学生が飽きないのは、提供されるビデオやグラフなどの教材が厳選されて、しかも抜群のタイミングで出てくるからだろうと思った。先生が同じ内容を教科書とともに「ここには〇〇と書いてある。つまり、これは〇〇という意味である。」というように言語のみの説明だったとしたら、きっと学生は自分で勉強するのとさほど違いを見出さず、教室は頭を垂れる学生でどんよりした雰囲気になっただろう。邑本先生はパワーポイントを上手に使って、言語のみの説明ではなく、絵を使ったり、時にはボランティア学生を募って、前に出てもらって実験をして例として見せたりしていた。そして、1つのトピックの導入、例の提示が終わると、必ずそこまでの情報をまとめているので、今何が話されたのか、何の実験や例が提示されたのか、再度確認することができ、とてもわかりやすかった。このような「わかる」という感覚は学習意欲をそそるものだと実感できた。（言語教育学・助教）

書き込み用プリントの効果　私が特に着目したいのは、書き込み用のプリントである。書き込み用プリントには、授業内容の見出しが書かれている。学生は、講義の内容をそれぞれの見出しの下にメモしていく。講義のオリエンテーションでは、書き方の見本として、過去の受講生の書き込み例を提示して示す。また、最下部には、「授業に対するコメント」欄が設けられている。邑本先生によると、そこには、講義を受けての自分の考えや、自分の過去、身の回りのこととどのように関係しているかを書き、逆に感想はいらない、ということである。用紙は、学生によるコピー防止、講義ごとに見分けがつくよう、色が付いた紙を利用し、綴じられるよう、あらかじめ穴をあけている。全15回の講義終了時に、回収した書き込み用プリントは、学生ごとに綴じて返却する。この書き込みプリントの運用が、非常に機能的であると感じた。書ける面を制限することで、教員側は講義の内容を絞って構成する必要があるし、学生側も、講義を聞きながら要点を絞って記録する必要がある。もちろん、学生のノートに自由に記録させてもよいのであろうが、１回の講義が１枚にまとまることによって、教員側の整理の煩雑さがなく、学生側としては、後から見返すことも容易であろう。（教育工学・研究員）

グループワークの導入　今回の授業参観から一つのアイデアを得た。それは、学生をいくつかのグループに分け、授業内容に基づき演習問題を作らせ、それを授業内で解く、又はグループ間で交換して解かせて解法を教え合うというものである。演習問題を作成するには当然ながら授業の内容をしっかりと理解していなければならない。物理学や数学の問題の場合、基本的に答えが無数にあるということはないので、学生同士の議論も収束することが期待される。授業内で作りきれない部分は、レポートとして課すことにより、授業外学習時間を確保することもできる。また、グループで一つの問題に取り組むことにより、コミュニケーション能力を養うこともできる。さらに、板書やスライドの多い理系基礎科目では眠気覚ましにもなる。作らせた演習問題の難易度を見て学生のレベルを計ることもできるかもしれない。機会があれば今後試してみたいアイデアである。（天文学・助教）

【授業参観を実施してみて（邑本俊亮先生より）】

授業参観に対する抵抗感はほとんどありません。いつでも誰でも自由に見に来てください、という気持ちでいます。参観によって授業運営に支障が出ることはありませんし、普段通りの授業をお見せできると思います。なお、毎回、それぞれの授業ごとに異なる特徴がありますので、それを事前にある程度ご承知いただいたうえで、参観者に見たい授業を選んでもらえたらと思っています。

授業参観後のディスカッションは非常によい取り組みだと思います。多様なバックグラウンドの参観者が来てくれるので、いろんな立場からの意見が聞けて、とても新鮮です。私の授業の組み立て方や授業内の仕掛けや工夫に関して、参観者に驚いてもらえたり、コメントをもらえたりするのはもちろんうれしいことですが、自分ではまったく意識せずに授業中に実践していることなどを指摘してもらえることも多く、たいへん参考になります。自分が意図して実践・実行していることについては、それがうまく機能していることを再確認できて、今後も継続してやっていこうと思えます。一方、教員サイドからは見えない不備な点や、意図していたことが機能していなかったことに気づかされることもあり、授業運営の修正や見直しを考える良いきっかけになっています。

2016年度は５回の授業参観をお引き受けしましたが、それほど負担には感じませんでした。むしろ、私自身モチベーションが少し上がっていたくらいです。参観者にはぜひ、１回だけでなく、複数回来ていただきたいです。なぜなら、授業は１回で終わりなのではなく、セメスターを通じた連続性があるからです。ひとつひとつの授業をどのようにつなげてトータルな授業づくりをしているのかについて知ってもらうことも、たいへん重要なことだと思っています。

〔授業名〕 **応用数学 B**

〔授業者〕 早川美徳（東北大学 教育情報基盤センター 教授）

〔科目群〕 工学部　専門科目　　〔対象〕 工学部 1年次後期

〔授業の目的と概要〕

1. 目的　ラプラス変換、特殊関数、２階線形偏微分方程式について、それらの基礎を学習・理解し、計算力と応用力を身につける。
2. 概要　工学に現れる現象の解明に重要な役割をはたす応用数学の一部であるラプラス変換、２階線形微分方程式について、また工学に応用される特殊関数のうち、特にガンマ関数、ベータ関数、ルジャンドル関数、ベッセル関数について、それらの基礎を学習する。

〔授業の到達目標〕

上記のいくつかの特殊関数の基礎的な性質を理解し、その工学への応用とそれらの公式を用いた計算ができるようになること。ラプラス変換とその逆変換を理解し、それらが計算でき、微分・積分方程式などが解けるようになること。さらに、２階線形偏微分方程式が工学にどのように応用されているかを理解して、変数分離法を身につけること。

〔授業内容・方法と進度予定〕

第１回　ラプラス積分とラプラス変換
第２回　ラプラス変換の性質
第３回　ラプラス逆変換１
第４回　ラプラス逆変換２
第５回　微分方程式と積分方程式への応用
第６回　ガンマ関数とベータ関数
第７回　ルジャンドル関数１
第８回　ルジャンドル関数２
第９回　ベッセル関数１
第10回　ベッセル関数２
第11回　円柱座標または極座標を用いた変数分離法（３次元のラプラスの方程式など）
第12回　楕円形の偏微分方程式（２次元のラプラスの方程式など）
第13回　放物形の偏微分方程式（１次元の拡散方程式、熱伝導方程式など）
第14回　双曲型の偏微分方程式（１次元の波動方程式など）
第15回　２階線形偏微分方程式の標準形

〔教科書および参考書〕

(1) 『電子情報系の応用数学』田中和之・海老澤丕道・林正彦（2007）朝倉書店、教科書
(2) 『応用数学講義』堀口剛・海老澤丕道・福井芳彦（2014）培風館、参考書
『応用解析学』廣池和夫・守田徹・田中實（1982）共立出版、参考書

〔成績評価方法〕

定期試験の成績（85%）と授業中の演習問題と章末問題のレポート等（15%）を統合して評価する。再試験は定期試験の不合格者に対して実施する。

〔授業時間外学習〕

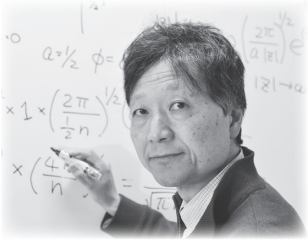
授業時間は限られているので、自主学習が重要になる．毎回の授業に対して、予習（２時間）と復習（２時間）は最低限必要である。手を動かして式を導きながら教科書を何回も熟読すること。

【この授業の特徴】

本授業は工学部の専門科目で、履修者は60人程度（2016年後期）です。黒板を使用した伝統的な授業形式ですが、早川先生はご自身で学生とのコミュニケーションツールを開発してウェブ上で運用しており、学生がスマートフォンなどを利用して気軽にコメントを寄せることのできる環境を提供しています。このツール「大福帳.js」についてはコラム③（p.55）で詳しくご紹介します。

【早川美徳先生から】

専門：数理物理・物性基礎、基礎工学



数年前にこの科目の担当を始めた当時は、指定された教科書の内容をつまみ食いするような講義となってしまい、トピックの繋がりも悪く、受講生の反応も今ひとつでした。私自身、フラストレーションを感じながら教壇に立っていました。そこで、理工学の現場で使える数学の基礎を身につけるという観点から、私なりに内容を整理し、流れに必然性があり、他の科目との関連性も感じられるように工夫してみようと思い立ちました。私が学生の頃に受けた同名の科目に比べると、内容はかなり「軽量」になっていると思います。

授業そのものは、黒板を使った非常にクラシックなスタイルです。ただ、駆け足にならないように、授業時間中に学生自身が演習に取り組む時間を設けたり、意図的に板書を途中で止め、ノートにその続きを埋めてもらったりしています。また、2016年からは、自作のウェブアプリ（『大福帳.js』。どなたでもお使いになれます）を使って受講生とのコミュニケーションを図っており、以前に比べ彼らの様子が把握しやすくなりました。また、教室の雰囲気も良くなってきたのではないかと感じています。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：観察型

ICT の活用　今回の授業参観の中で特に感銘を受けたのは、授業時間外の２つの取り組みでした。ひとつは、早川先生はアプリを開発して、学生とのコミュニケーションに使用しているということです。授業中に宿題を出して、その宿題の答えと今日の授業に関するコメントを、学生がスマートフォンなどを利用して書き込み、それをもって出席と授業態度を評価するとのことでした。さらに、それぞれのコメントに対して、早川先生から学生に返信もしているそうです。学生から寄せられたコメントの中には、授業で分かりにくかったところの説明を求めるものもあるらしく、授業の改善にも役立つと思われました。『大福帳』の web 版とのことで、私は大福帳自体知らなかったのですが、是非使ってみたいと思いました。もうひとつは、ISTU[※3]を利用して、授業の補足説明を行っているということです。授業中に説明を省略した箇所や、宿題の解答、コメントで説明が分かりにくいとされた部分をビデオで撮影して、配信しているとのことでした。私が担当している授業でも、教えなければならないことが非常に多く、授業時間内で終わらず、教科書を読んでおくように指示することが多かったので、ISTU を使用する方法もあることが分かり、参考になりました。（歯学・助教）

板書の意義　早川先生の授業は、本当に黒板が基本であった。たまたま早川先生の好み、ということもあったのかもしれないが、応用数学のような授業で、なぜ黒板がいいかが、よく分かった気がした。同じことをパワーポイントでやっていたら、学生がきっと眠ってしまったと思う。そして、大きな黒板と違い、一つのスライドに載せられる情報も限られており、スライドが変わったら前のスライドの内容が目の前から消える、という短所もあると、よく分かった。早川先生は板書が大変お上手で、黒板をセクションに分けたり、色のチョークを使われたりして、授業が

※3　ISTU：東北大学インターネットスクール（Internet School of Tohoku University）。東北大学で開講されている授業科目について、講義の動画やデジタル教材の閲覧、レポート課題の送受信などが可能なサービス。http://www.istu.jp/

終わったらこの日の主な内容が、わかりやすく黒板に残っていて、授業全体もよくわかる黒板になっていたと思うし、復習にもきっと役に立つだろうと思った。今後自分の授業でも黒板をもっとうまく使いたいと思う。（法学・助教）

数学への愛　ISTU の活用に際してはいろいろと示唆を受けた。実際の授業との連動、休講の代替など、それぞれの特徴を考えた上で授業に取り組むことが可能であるだろう。担当教員は温和な雰囲気の持ち主であり、授業にもそれが醸し出されていた。主観的な感想だが、担当教員の数学への愛が伝わって楽しかった。授業内容以外にも学生の興味を引き出す要素はいろいろあるということを授業参観と通じて学ぶことができた。授業は板書を中心に進行され、筆記する学生が多かったが、スマホで写真を撮る学生も何人かいた。学生が自分に合う方法を選択して授業に用いることは、自由な雰囲気とセットになっているような印象を受けた。時間の問題もあり、学生の学習状況を確認するのは難しそうだったが、宿題を通じてコミュニケーションを取っているとのことであった。（宗教学・大学院生）

演習のタイミング　これまで演習時間は授業の最後の10分あたりでやるのが良いのかなと思っていたが、本授業では、授業の途中（40分経過したころ）に行っていた。これは学生や教員が気持ちを切り替える上でとても良い方法だと思った。また、学生も、授業を集中して聞かないと演習に対応できなくなってしまうので、学生の授業の集中のためにも、授業内演習は有効だと思う。（理学・助教）

プリントの配布　工学や物理学など、数学をツールとして使う授業では、近似計算がとても重要になるが、授業では、階乗計算が、スターリングの公式で如何によく近似されているかをグラフにしたプリントを配るなど、近似計算の精度が視覚的に学生に分かるようにしていた。これまで、黒板に加えてどのようにプリントを使えばよいのか、いまいち把握でき

ていなかったが、この授業でプリントの使い方の有効な具体例を知ることができた。（理学・助教）

補助教材の活用　授業内容の理解を深めるための教材として、計算結果をプロットしたグラフ（回覧資料）と、先生が手作りしたという立体模型が用意されていました。いずれも、学生が視覚的にも数式の意味を理解するのに役立っていました。難しい事柄を説明する場合には、具体例を示したり、視覚素材を用いたりと、複数のアプローチを行うことが有効であると実感しました。（歯学・助教）

学生が授業内容に興味を持っている証拠　１時限目ということもあってか、遅刻してくる学生が多くて、「この学生たちは、大丈夫かしら？」と思っていたのですが、授業が終わってから学生同士で話している内容に耳を傾けると、授業の内容でした。学生同士が授業の内容の話をするのは、当然のことなのですが、学生に継続的に興味を持たせるような様々な工夫がされていたからこそだと思いました。（歯学・助教）

雑談の効果　雑談で、近似計算の極意を所ジョージの歌詞「だいたいで良いから正確に教えてください」を引用して説明していたが、これは現在研究している私には非常に腑に落ちる表現であった。ピンとこない学部生もいるかも知れないが、将来彼らが大学院などで研究生活に入ったときに、この言葉の深い意味が分ってくると思われる。意外とこういう言葉が、将来に渡ってずっと学生の頭の中に残るので、雑談も結構重要だと思った。所ジョージの話以外にも、楽器の一次元性と波動方程式の関係や、鞍点法の模型を使った説明など、具体例を用いた授業をしていて、学生の授業に対する興味をいかに引き立てるかを考える上で大変参考になる授業だった。（理学・助教）

【授業参観を実施してみて（早川美徳先生より）】

正直なところ、授業参観の依頼があったときは嫌だなぁと思ったのを覚えています。自分で授業をしていてうまくできてないなと思うことが多く、そこを人に見られるというのは、居間に他人があがってくるような感覚に似ていて、いいこともある反面、あまりいい気持ちがしないですよね。でも、授業をビデオ撮影されるということを経験していたので、その点の免疫はあったかもしれません。

授業参観後のディスカッションでは、参観に来た若い先生方がとても細かい点によく気づいていて、「そういう見方もあるのか」と逆にこちらが教えてもらうことが多いと感じました。中には法学専門の方もいて、分野が全然違うのに大丈夫なのだろうか？と思ったのですが、とても的確にいろいろと指摘をしてくれました。そういう意味では、授業に文系・理系もなくて、お互い参考にできるところがあるんですね。結局、大事なのは「学生とどうコミュニケーションをとるか」というところで、そこは普遍的なのでしょうね。

私の「数学愛」を指摘してくれている人が何人かいましたが、これは自分では普段意識していないので意外でした。私自身、自分は教員に向いていないと思っているのですが、人から見ると案外そうでもないのかな、と思いました。教員が発している雰囲気も大事なのだな、と。そうしたことをディスカッションのやりとりの中で感じたというのが印象に残っています。「授業後に学生が授業の話をしていた」なんてことは、自分で授業をしているだけでは得られない情報なので、参観した人がそういうことに気が付いて、こちらに教えてくれるというのは貴重ですよね。そうしたことを指摘してもらえるというのは嬉しいものです。

〔授業名〕 **機能形態学１**

〔授業者〕 平澤典保（東北大学大学院 薬学研究科 教授）

〔科目群〕 薬学部　専門科目　　〔対象〕 薬学部 １年次前期

〔授業の目的と概要〕

機能形態学では、生体を構成する細胞・組織・臓器の機能に関して、それらの形態とのかかわりについて学ぶ。関連する組織学や生理学的内容をおりまぜながら、生体が恒常性を維持するために、それぞれの組織、臓器の果たしている役割について理解する。機能形態学１では、生命機能を支える細胞、造血組織、上皮・結合組織の微細な構造と機能について学び、さらに人体の内部の概観と呼吸器系、消化器系の構造と機能について学ぶ。

〔授業の到達目標〕

各細胞・組織・臓器の形態及び構造上の特徴とそれぞれの機能について説明できるようになる。

〔授業内容・方法と進度予定〕

第１回　人体の構造
第２回　細胞の構造と機能（Ⅰ）
第３回　細胞の構造と機能（Ⅱ）
第４回　細胞の構造と機能（Ⅲ）
第５回　血液・造血
第６回　リンパ系
第７回　上皮組織
第８回　結合組織
第９回　呼吸器系
第 10 回　消化器系
第 11 回　食道・胃
第 12 回　小腸・大腸
第 13 回　肝臓（Ⅰ）
第 14 回　肝臓（Ⅱ）
第 15 回　肝臓（Ⅲ）

〔教科書および参考書〕

(1) 『機能形態学　改訂第３版』櫻田忍・櫻田司（2013）南江堂，参考書
(2) 『機能を中心とした図説組織学』バーバラヤング（2009）医学書院，参考書
(3) 『アメリカ版　大学生物学の教科書』D.サダヴァ（2014）講談社，参考書
(4) 『カラー　基本生理学』バーン・レヴィ（2003）西村書店，参考書

〔成績評価方法〕

筆記試験（定期試験）と出席状況をもとに評価する。

【この授業の特徴】

本授業は薬学部の専門科目で、学部一年生が履修します。履修生は80～90人程度（2016年度）の比較的大人数授業です。パワーポイントのスライド提示に基づいた解説を中心に進められます。

【平澤典保先生から】

専門：生物系薬学

本授業は、薬学部1年生の最初の専門科目であり、大学の講義が今までの授業とは違うということを知り、そして、薬の対象であるヒトの体の不思議さを知るという位置付けにあります。薬学教育には、薬剤師育成のためのコアカリキュラムがあり、教えるべき項目が定まっていますが、本学ではそれにとどまらず、将来研究の道に入っても役に立つような内容にまで発展させることを心がけています。特に意識していることは、(1) 組織の写真を多く見せること、(2) 単なる専門用語の暗記ではなく、形態と機能の結びつきを考えられるような講義とすることです。臓器・組織の構造を学ぶ上で、簡略化した模式図は理解しやすいのですが、それだけでは研究には役に立ちません。組織の顕微鏡写真を多く見て、見る目を養ってもらいたいと考えています。そのため、本授業では、組織像をプリントで配布するとともに、パワーポイントで示し、さらに同じものを ISTU で見ることを可能にしています。こうすることにより、印刷ではわからないさらに細かいところまで、拡大して見ることもできます。また、専門用語は当然覚えなければなりませんが、それよりも、それぞれの臓器が効率よく機能するためには組織はどのような構造を持たなければならないかを最初に考え、それぞれの機能を支持する実際の構造と細胞の特徴を学んでいく、ということを重視しています。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：観察型

学生にどう取り組ませるか　参観してみて、分野の違いを超えて自分も取り入れられそうな工夫点がたくさんあることに気づいた。一番参考にしたいと思ったのはスライドの創り方であった。実習と違い、パワーポイントを使う講義形式の授業では、学生が、資料があることに安心してほとんど授業を聞かない、メモを取らない、集中しないというのが、数年来の悩みだった。しかし、平澤先生が取り入れていらっしゃった穴埋め形式のスライド、配布資料では、ほとんどの学生が寝たりしゃべったりスマホをいじったりすることなく、講義に集中し、メモを取り続けていた。平澤先生は１年生の１学期だからでしょうとおっしゃっていたが、授業の後半、復習に入り、穴埋め作業がなくなると、一部の学生が寝始めたことからも、やはり学生の手を動かせることの意義は大きいようであった。逆にスライドをプリントに書き写す「作業」になってしまうという弱点もあるように思われたが、１年生を対象とした基礎知識の講義で、学生が自分なりの考えをもつことよりも、むしろ必要な知識を習得することが学習目標になっているこの科目のような場合には、とても有益であると思えた。（臨床心理学・准教授）

教材提示上の工夫　平澤先生は授業のパワーポイントのスライドの右上に赤字で重要とつけることでスライドにメリハリをつけていました。さらにスライドを作成する際には、下の部分に空白をあけているということでした。これは、教室でパワーポイントを映した際に、後ろの学生から「見えないため、見えるようにして欲しい」と要望があったからだということです。細かいことかもしれませんが、学生に少しでも機能形態学を理解して欲しいという配慮が素晴らしいと思いました。また、平面では捉えることが難しい内容については、平澤先生はイメージしやすいように胃の模型を持ってきて説明していました。内臓については、質感が大事であるとおっしゃっており、最終的には、3D を活用したスライドなどを作成すれば、もっと学生たちが応用力をもつことができるとおっしゃっていました。（教育心理学・大学院生）

学生に考えさせる発問　人数の多い講義で学生の発言を引き出すことが難しいというのも、数年前に初めて講義を経験したときから課題として感じていることだが、平澤先生がされていた、学生に「これは何でしたっけ？」「これはどういうことでしょうか？」「ここで大切なのは何でしょうか？」と質問を向けて、すこし間をおくというのは、面白い工夫点だと思った。学生の様子を見ていると、実際にその間考えていそうな人、質問を受けて過去のプリントを見返している人などがいて、全員とはいかないまでも、学生に考えさせる時間をもつという意味では役に立っているように見受けられた。また、授業後に平澤先生がおっしゃっていた「答えがわからなければ、わからないということに気づけることが重要」という点が、とても真をついていると思った。１時間半集中力を保つということはそれだけでも大変である。その中で、講義にリズムやメリハリをつけるという意味でも、この方法は有用であるように思えた。大人数の講義ではなかなかこちらから指名して答えさせるということが難しいことも多いため、こうした方法はぜひ参考にしたいと思った。（臨床心理学・准教授）

自分の授業を楽しむ　授業参観後に平澤先生が、機能形態学が楽しいから授業や授業の準備について全然苦にならないとおっしゃっていたのが、最も印象的でした。私も今やるべきことを楽しみ、問題意識を持って取り組んでいきたいと考えました。自身の専門分野を楽しむこと、好きであることは今後重要であると改めて感じました。平澤先生はつねに、基礎力はもちろんのこと応用することができる学生を育てたいという意識を持って授業づくりをしていると感じました。 私もシラバス等作成する際には、授業を通して学生たちに何を理解してもらい、授業後に学生たちがどのように変化して欲しいかということを考えなければならないと感じました。（教育心理学・大学院生）

弛まぬ授業改善の取組み　ISTU をフルに活用されている点も印象的であった。やむを得ず欠席した学生や写しきれなかった学生への対応とい

うことだけでなく、回答は別ファイルにして試験勉強をしやすくしている点など、ユーザーフレンドリーな工夫がこらされていて、その視点自体が大変参考になった。学生に何を身につけてほしいのか、どういう勉強をしてほしいのか、それを実現するためにできる工夫は何か、という視点は、常にもっていたいと感じた。同様に、長年同じ科目を担当されているにも関わらず、今でも毎年のように資料の見直し、最新のツールの活用をされているという点も参考になった。授業と研究のバランスという話題の中で、「良い研究発表ができることと良い講義ができることは同じことだから、そこに線引きはない」とおっしゃっていたことが、この日一番印象的で、自分自身もそのような姿勢で講義に臨みたいと感じた。（臨床心理学・准教授）

【授業参観を実施してみて（平澤典保先生より）】

授業参観と聞いた時、私の講義を見て参考になるのだろうかという不安がまず先に立ちました。この講義は何年もやっているものの、毎年、うまくいったと思う回もあれば、今回うまく説明できなかったと思う回もあるのが現状です。本来喋るのは苦手だし、字は汚いし、いいところがない分、それなりの工夫はしてきましたが、それでも毎回の授業評価では色々クレームが来ることが多いです（それなりにさらに工夫を加えるようにはしているのですが）。そんな講義で役立つかとも思いましたが、それでも、本企画のように、見る側にその気持ちがあれば、悪いやり方は悪いやり方として参考になるのだろうということで、ある意味開き直って授業参観を迎えました。

実際やって見ると、そんなことを意識している余裕はなく、結局普段通りの授業となりました。授業後のフィードバックとして話を聞かせてもらった時には、授業の成績とは関係ない立場で客観的に授業の方法を見て、建設的な意見を述べてくれたことは大変ありがたいと思いました。自分の講義は自分ではなかなか客観的に評価できないものです。利害関係のある学生のコメントも必ずしもあてになりません。だからこういう機会は大変貴重です。もちろん、専門外の方であれば、授業の内容がわかりやすく伝えられているかどうかはわからないと思いますが、授業のやり方というコアの部分は共通であり、しかもその部分は色々なやり方があるので、ここを議論することは参加者の方にも重要であると思います。自分で受けた経験がないような講義の仕方は、なかなか思いつかないものですから、特に専門外の授業は参考になるのかもしれません。何れにしても、講義は単なる知識の押し売りではなく、教える人の想いも伝えるものですので、どうすれば良いかという決まった方法、正解はなく、あくまで自分なりのやり方を模索することが大事であると思います。拙い講義ではありましたが、少しでも参考になれば幸いです。

〔授業名〕	**日本語 F**
〔授業者〕	菅谷奈津恵（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 准教授）
〔科目群〕	全学教育科目 共通科目―留学生対象科目　〔対象〕 全外国人留学生 後期

〔授業の目的と概要〕

日本語能力試験 N1 合格レベルの留学生を対象とする。インタビューの練習を通して、日本語の文法・表現の運用能力の向上を図る。四技能（聞く、話す、読む、書く）のうち、特に「聞く、話す」活動を中心に行う。学期の後半には、各自が知り合いにインタビューを行い、その内容を発表する。

〔授業の到達目標〕

(1) 一般的なテーマの会話を聞いて、情報内容だけでなく話し手の心情が聞き取れる。
(2) その場の状況や相手に応じて、話題や丁寧さのレベルを調節して会話を進めることができる。
(3) 表現の選択や発音について、自身の使用する日本語をモニターすることができる。

〔授業内容・方法と進度予定〕

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回
第 3 回　インタビューの種類と基本的な表現
第 4 回
第 5 回
第 6 回　インタビュー例の聞き取り
第 7 回
第 8 回　発表練習とゲストインタビュー
第 9 回
第 10 回　プロジェクト実施計画と準備
第 11 回
第 12 回　インタビュー報告会
第 13 回
第 14 回　報告書の作成と礼状の書き方
第 15 回　まとめ

〔成績評価方法〕

インタビュープロジェクト 40%、宿題・提出物 20%、小テスト 25%、授業参加度 15%

〔授業時間外学習〕

受講生が主体的に計画と目標を立て、自立的に予習・復習に取り組むことを期待する。

【この授業の特徴】

本授業は外国人留学生を対象としており、履修生は例年10～20名の小規模クラスです。インタビューの計画、練習、実践、成果発表、ふり返りを通して「聞く、話す」活動を中心に取り組みます。授業参観の回では、参観者を「ゲスト」と位置づけ、各グループにゲストが1名ずつ加わり、受講生からインタビューを受けます。参観者は、単に教室後方から授業を視察するのではなく、授業中の大事な要素として組み込まれ、実際に受講生とのやりとりを通して、その学習の様子を肌で感じることができます。

【菅谷奈津恵先生から】　専門：日本語教育

この授業で対象とする留学生は、日常場面での日本語のやりとりは問題なくできるレベルにあります。さらなる上達のために、友達言葉と目上の人への話し方の違いや、効果的なあいづちのうち方といった微妙なニュアンス、表現について考えてほしいと思い、授業を実施しています。最終課題では、自分の知り合いにインタビューをして録音してくるという活動を行うのですが、普段じっくり話す機会のない人と交流するきっかけとなることも期待しています。

最終課題でのインタビューのほかにも、受講生が話している日本語を録音する機会が2回あります。初めに行うのが、受講生同士で行う短いインタビューの録音です。自分の日本語を聞くのは初めてだという学生もいます。自分の話し方の特徴や、こういうことが足りないということに気づいていくようすが確認されています。

2回目はインタビュー後の報告会で、発表のようすを録画しています。報告会の発表と最終課題のインタビューについては、ふり返りレポートも課しています。レポートでは、自分がうまくできたところと不十分なところを、分析してまとめます。週1回の授業でできることは限られていますが、ふり返りの成果が、授業外の場面でも活かされるといいなと思っています。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：参加型

グループワーク　私が経験してきた授業のほとんどは教員から学生へ情報を伝えるという形式のものが極めて多く、グループワーク形式のものは、ほぼ経験したことがありませんでした。この場合は学生さんに自ら行動してもらうわけなのですが、今回の授業では特にそれをより実りあるものにするために事前に準備するための課題が宿題として課されていたのが効果的に思えました。また、とにかく学生さんたちが熱心なのに非常に驚かされました。（環境科学・大学院生）

授業の目的の確認　菅谷先生の授業では、まず学生に授業の目的を個々に確認していました。先生が講義の目的を話した後に、授業を展開していくという講義は何度も受けたことがありますが、学生一人ひとりに目的を尋ねていくという授業は初めてでしたので、とても新鮮に感じました。個々のレベルに合わせて柔軟に対応していくということも大切だと感じました。このようなことについては、今後、自身が大学教員となり、少人数のゼミを担当するときに必要なスキルではないかと考えました。ゼミの場合、個々の卒論のテーマに対して議論を行っていく場合が多いと思います。ですので、個々が卒論の内容を発表していく前に、論文を書いている中で、「どのようなところが困っていて進んでいない」などと具体的に提示していくことで、発表を行う側も聞いている側も双方向にメリットのある議論を展開できるのだと思います。また、教員としてそのような授業展開を行っていくことが重要であると感じました。（教育心理学・大学院生）

宿題へのモチベーション　この授業では日本語能力のうち、特に「聞く・話す」という日本語会話に重点が置かれているようだ。今回見学させて頂いた回はインタビューの実践で、学生が宿題として質問内容を考えてきており、それを我々がゲストとしてインタビューを受け、その内容をまとめて発表するというものであった。重要な点は、事前学習である宿題をその日の授業で活用することによって、宿題をやってくるモチベー

ション、および授業に参加するモチベーションを高めているという点である。宿題といえば、講義形式の授業だと、その日やった内容の復習や問題演習がメインとなることが多いが、このように次の授業の準備としての宿題の使い方は、自宅学習および授業参加の両方をモチベートするものとして効果的であると感じた。（天文学・助教）

全体における１回の授業の位置づけ　今回の授業後ディスカッションにおいて菅谷先生のおっしゃっていた「実際にインタビューや発表をしてみて、例えば敬語が口から出たり出なかったりしたことなどに学生さん自身が気づいたことから、今後の授業における学習の動機になるだろう」というのはまさに今回１回分の授業がその後の授業に与える影響であると認識しました。これを通じ「全体における１回の位置づけ」という言葉そのものは意識の上に存在していたとしても、具体的にそれがどういうものであるかというのを具体例を通じて見たり聞いたりしたことはおそらくほとんどなかったのだと分かりました。これは私の研究にもいえることで、一貫してこの言葉の意味についての実感がないことを認識しました。（環境科学・大学院生）

授業の構成と意図　授業の形式も、事前の準備、インタビューの実践、インタビューした内容をまとめて発表と、各要素をすべて１回の授業に取り込んでおられて、素晴らしいと感じた。このように３要素全てを１回の授業で扱うのは、今回のインタビューという特殊な授業形式だからであり、普段は各要素に絞って扱うことの方がむしろ多いというのが、後の菅谷先生の説明であったが、そのように15回全体のなかで各要素をバランスよく配置し、そのなかで今回のインタビューのような実践形式のものを、15回の真ん中と最後に配置するという授業の設計は、なるほどよく考えられているなと感じた。実際、発表に関しては今まで扱ってこなかったので、今回のいきなり実践の発表を受けて、後の発表に関する授業のモチベーションも上がるだろうという授業計画はなるほどと感じた。（天文学・助教）

学生の多様性　学習者の母語がさまざまであったことにも興味がわいた。分かっただけで、中国語、韓国語、タイ語、スペイン語を母語とする学習者がいた。学習者の母語が多様なほど、教員の苦労も増すのではないかと思われた。たとえば、直説法でうまく教えられないときの奥の手（禁じ手）である「相手の母語で教える」がほとんど使えない。それについても菅谷先生に尋ねると、特に苦労は感じていないという趣旨のお答えであった。むしろ「ペアワークの際、異なるアイデンティティの学習者同士を組にすると、互いに補い合って学習するといったメリットがある」とのこと。私は、学習者の母語があれほど多様な教室で日本語を教えたことがない。なるほどと唸らせられた。（日本語教育学・准教授）

学生の熱心さ　実際にインタビューを受け、留学生たちの日本語能力が非常に高いことに加え（これは上級者レベルなので当然かもしれないが）、授業への積極性に関しても改めて驚きを感じた。海外に大学進学してくる留学生は総じてレベルも意識も高い点は、授業の組み立て云々の話以前に、もっと広く日本の大学教育として、どのように日本人学生の意識を高めていくかという点も重要な観点かもしれないと感じた。そういう意味で、留学生との交流系の講義というのは、いい試みかもしれないと感じた。もちろん日本人学生にも、特に東北大の学生は真面目でモチベーションが高い学生が多いので心配していないが、もしいわゆる私学で講義を担当することになった場合は、何か考えなければならないかもしれないと思った 。授業全体の雰囲気も非常に良いと感じた。自分がインタビューを受けた二人も、準備の段階でも、実際のインタビューの間も、その後も発表のためのまとめの段階でも、日本語で非常に仲良く活発に議論していた。これも留学生達の意識の高さという側面が大きいのだろうが、それに加えて菅谷先生が、今やるべきことを明確に指示していた事で、学生たちがやるべきことをしっかり把握しているなど、授業の進め方やコントロールがうまいのも一因であろうと感じた。（天文学・助教）

【授業参観を実施してみて（菅谷奈津恵先生より）】

私が授業参観をお受けする理由は、二つあります。一つは授業を受けている学生にとってプラスになることです。もう一つは、自分自身にとっても、授業をふり返る機会となることです。

授業参観では「ゲスト」に学生がインタビューするという形をとっていますが、これは学生にとっては大きな刺激となっています。ゲストが来る日を、学生はとても楽しみにしているようです。授業参観の前には、それまで学んだことを復習したりして、準備していました。普段は遅刻の多い学生も、当日は早めに教室に来てそわそわしています。終わった後も、ここがうまくできた、あるいはできなかったとふり返ることで、学びにつながっていると感じます。

学期の中盤でこうしたひとつの山場を設けられるということは、授業を組み立てる上でも、とてもプラスになっています。人を呼ぶからには、自分もちゃんと授業をやらなくてはという意識を持つことができます。

授業後のゲストの方々とのディスカッションは、自分の授業や大学全体での授業を、客観的にとらえる機会にもなっています。活動演習型の授業だったのでびっくりしたというコメントを、毎回参観者からいただきます。私の授業がそんなに驚かれるものなんだということに、逆に驚きを覚えました。語学の授業としては当たり前の方法だと自分では認識していたので、非常に新鮮に感じました。学習目的にもよりますが、その言語を使えるようになるためには、知識を提供するような講義型の授業ではなく、活動演習型で行うことが必要だと考えています。

授業で英語や留学生の母語を用いるかどうかという点についても、よくコメントをいただきます。この授業では、日本語を日本語だけで教える方法（直接法）をとっていますが、それは学生の

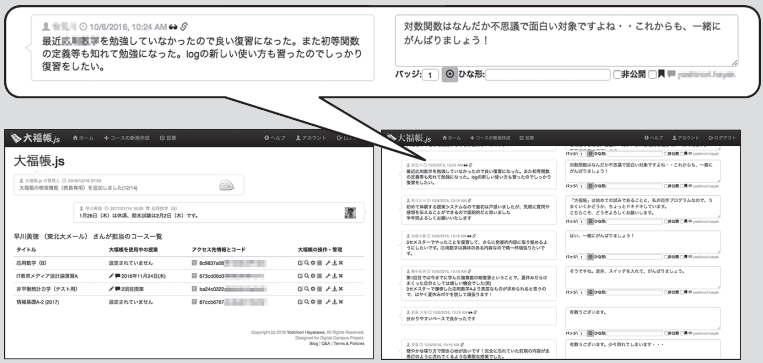
日本語力と共通理解言語、私の言語能力からして、直接法が最適だからです。初級の日本語クラスでは、下手な英語を混ぜて授業を行っています。教室での使用言語は、私の中ではほとんど無意識の選択となっていたため、改めて考える機会となりました。

このように、授業参観は学生にも私自身にもプラスが多いと感じています。参加型の活動を行うような語学の授業では、「ゲスト参加者」を受け入れやすい側面があるかもしれません。ただ、参観者の方々からは、普段の授業を見たかったという声も、いつもいただきます。それは確かにそうだろうなと思う面もあります。

コラム③　学生と教員のコミュニケーションツール「大福帳 .js」

応用数学 B(p.36) の実践でご紹介した早川美徳先生は、多人数授業での利用を想定した学生と教員とのコミュニケーションツール「大福帳 .js」を開発し、ウェブアプリとして公開しています。東北大学では、授業におけるコメントペーパーとして、ミニットペーパーを提供していますが、このオンライン版だと考えると理解しやすいかもしれません。紙ベースのツールも効果的ではありますが、大人数授業での運用を考えると、その回収の手間や整理、保存、フィードバックの労力は決して少なくはありません。早川先生が開発した「大福帳 .js」では、これらをオンライン上で実施できます。シンプルな画面で、スマートフォンでもスムーズに動作します。

ひとつの画面上で、全ての書き込みを眺めながらコメントを記入したり、複数人で分担してコメントをフィードバックしたりすることも可能です。また、予め回答文のひな形を登録しておくこともできます。Google Chrome を使用し、コメントの音声入力も実施できます。加えて、受講者が公開を許可した書き込みは、Twitter のタイムラインのように、受講者全員で共有することも可能です。その他、学生には LINE で教員からのコメントを通知することもできます。



利用は無償です。ご興味のあるかたは、下記ウェブページをご参照ください。

「大福帳 .js」https://goose.cite.tohoku.ac.jp/daifukujs/

〔授業名〕 **英語 C2「Exercises in Practical English」**

〔授業者〕 ダニエル・アイコースト（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 講師）

〔科目群〕 全学教育科目 共通科目―英語　〔対象〕 全学部 ２年次後期

〔授業の目的と概要〕

This is a 4-skills discussion-based course that aims to improve students' ability to communicate and express their thoughts orally and in writing.
The objectives of this course are to have students:

1. utilize and expand their English vocabulary
2. think critically about assigned topics for discussion
3. develop their English listening and discussion ability
4. develop their English essay and paragraph writing ability

〔授業の到達目標〕

Students will be able to:

1. develop their thinking and knowledge through doing preparation for discussions
2. use and expand their current English vocabulary through doing discussions and casual speaking
3. write a well organized reaction following a discussion in paragraph form in 15 minutes

〔授業内容・方法と進度予定〕

1. Discussions about an assigned topic in groups of 3-4 students. Discussions will be based on written articles and videos available on the Internet. Students will do written preparation about a topic, discuss the topic with other students in class, and write a concluding reaction about the topic including what they learned from other students.
2. Supplementary speaking and writing activities
   Students are expected to come to class on time, be prepared for the class and participate positively.

第 1 回　Registration
第 2 回　Supplementary Activity 1
第 3 回　Discussion 1
第 4 回　Discussion 2
第 5 回　Discussion 3
第 6 回　Supplementary Activity 2
第 7 回　Discussion 4
第 8 回　Discussion 5
第 9 回　Discussion 6
第 10 回　Supplementary Activity 3
第 11 回　Discussion 7
第 12 回　Discussion 8
第 13 回　Discussion 9
第 14 回　Discussion 10
第 15 回　Final Activity

〔成績評価方法〕

Assessment criteria:
Attendance; Discussions: written preparation, discussion participation, written reaction;
Supplementary activities; TOEFL-ITP(30%)

〔授業時間外学習〕

Students will watch videos about a topic, think about the topic, and write their answers to questions about the videos and topic as preparation to discuss the topic.

【この授業の特徴】

この授業は、学部一年生向けの必修の英語の授業です。受講生は20～30人と比較的少人数クラスです。本授業では、アイコースト先生ご自身が開発したPDRメソッド（Preparation/Discussion/Reaction Method）：学習者を主体としたディスカッションの授業を行う方法が用いられています。この方法では、事前の予習、授業中のディスカッション、ディスカッション後のリアクション（感想）の記入という3つの段階で学習が構成されています。PDRメソッドについては、PDブックレットVol. 7『ディスカッションが英語授業を変える Preparation /Discussion/ Reaction Method Handbook』に詳細が解説されています。授業参観では、参観者は実際に学生とのディスカッションに参加します。

【ダニエル・アイコースト先生から】

専門：英語教育

ディスカッションの重要性は指摘されているのに、そのための授業や訓練の場がない、という現状を解決するべく開発したのがPDRメソッドです。ディスカッションを行えるようになるためには、それなりの訓練が必要です。この授業では、コースガイドを提供し、ディスカッションのモデルを提示し、まずはそれを真似ることから始め、徐々に自分の考え方を英語で表現できるようになるための訓練の機会を提供しています。

授業時間の大半は、受講生同士の話し合いに時間が当てられ、教員の役割はあくまでも進行役です。なので、授業中の教員の様子を見た人は、単にタイムマネジメントだけを行って楽をしているように見えてしまうかもしれません。しかし、受講生が最大限に英語を活用し、実践的な力を身につけるためには、小さなグループでの学習者同士のディスカッションの方が、教員の話を聞くよりもはるかに効果的だと考えています。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：参加型

目に見えて役立つ事前学習　アイコースト先生の英語の授業は、ディスカッション形式のものであった。事前学習としてTEDの動画を視聴し、設定された設問に答える、自分で新たに設問を考えそれに対して回答する、という宿題をこなして学生は授業に参加する。授業ではその内容をもとに3-4人のグループでディスカッションする。重要なポイントは、この事前学習を授業の中で最大限活用する事であり、そのため、事前学習をしっかりこなす事が、自分自身の授業の助けになるという事である。このように、この授業は非常によくシステムとして設計されている点が素晴らしいと感じた。特に日本ではディスカッション形式の授業は少なく、それが英語でとなると学生はさらに戸惑うだろう。そこで、授業の中で議論する内容を宿題として事前に書かせる事で、それを助けに議論に参加する事が可能となるし、目に見えて役立つ宿題であるが故に、学生の宿題に対するモチベーションも高まる。さらにディスカッションを３回にわけ、内容を徐々に高度にしていく事で、順を追ってステップアップしていく仕組みもよく考えられている。（天文学・助教）

コースガイドの配布　初回授業で配布されているコースガイドには、授業に関するルールや指示内容が丁寧に英文和文併記で示されており、成績評価方法も明示されていた。こうしたコースガイドの配布は、これまでに経験したことのない手法であったが、その有効性を実感した。これまで、自分の担当している授業では、A4 １枚のパワーポイントで、受講に際しての注意事項を説明してきたが、成績評価の方法を学生に明確に示したことはなかった。最終試験で評価するにせよ、その基準を明確にする必要はある。評価法を含めて、文書で学生へ周知することを来年度の授業から導入していきたい。授業参観を通して、授業の企画（シラバス作り）と準備をもっと真剣にやらなければならないことを痛感し、これまでを反省している。アイスコート先生の授業は、「学生の英語力を伸ばしたい」、という先生の思いが伝わってくるものであった。全15回を通して、学生がどうなっていることを期待するのか、教員側の明確

な目標設定が必要であることを改めて学んだ。（農学・助教）

「予習」への動機づけ　予習の成果を成績評価に組み込むことで、予習へ取り組むモチベーションを高め、それはすなわちディスカッションの準備もより入念に行うということであり、そのような準備を基に、学生は一層話したいという感情を抱くだろう。プレパレーションワークシートにおいて、学生自身の質問を提示させるという点は、学生の授業への参加意識を高めている。ディスカッションした内容について、ライティングを通して振り返る機会があり、ディスカッションそのものが、やりっぱなしの状態で終わるわけではない点も、学生の、他の学生の発言を聞き、対話しようとする姿勢につながっていると思われる。このように学生の関心に沿った動画、英語のディスカッションに不慣れな学生に配慮したコースガイドなどの教材、段階的にレベルアップしていく授業の進め方および成績評価など、それぞれがあいまって授業内の学生の発言を促進し、英語能力を高めるようプログラムされていることが分かった。自分が今何を目的としてどんな作業を行うかということを、学生自身が明確に把握し、理解することは、学習を有意にするものであり、教員はそうなるよう意図して、教材を準備し、授業を組み立てる必要があることを改めて認識した。１コマの授業の進行自体が前述のようにシステム化されているだけではない。ディスカッションの授業に入る前の段階で、学生がコースガイドをきちんと読み、理解しているかを確認するクイズや授業１回分を使ったディスカッションの通し練習により、15回分の授業を一貫して円滑に進めることが可能となっている。また、来年度の教材探しという意図も含めた最終提出課題を設定し、授業評価のアンケート以外の方法を通して、学生の視点を用いて授業を改善し、アップデートさせていくという仕組みも巧妙だと思った。（法学・大学院生）

×印スタンプのパワー　この授業では先生は２種類のスタンプを用意しており、プレパレーションワークシート（宿題）を充分やってきた人に「OK」、やってきていない人や未完成の人に「×」のスタンプを押して

まわっていた。これは学生にとって励ましになると思う。例えば、「×」の場合、多分本人はショックかもしれないが、次は「OK」のスタンプを押してもらうために、頑張ろうという刺激になる。授業中にスタンプを押すのは子供っぽく見えるが、特に外国語を勉強する時、この「スタンプパワー」は決して軽視することができないと思う。（文学・大学院生）

学生の参画意識を高める　「学生の持っている能力を活かし伸ばすのが教員の仕事」、「学生のモチベーションを上げるには、学生同士でさせた方が効果的である」という先生の言葉が印象的であった。語学のクラスという特性もあるかと思うが、日本の大学ではなかなか見られない教室の雰囲気や活動があり、とてもユニークな授業であった。学生は、毎回与えられた課題を事前にこなし、授業中はグループワークを通したアウトプット中心の進め方（ピアラーニング）がとられていた。授業時間内の先生の役割は、課題のチェックやグループ分け、タイムマネジメントなどが主であり、先生が学生に対して、英語を「教える」という指導は見受けられなかった。たとえ、英作文の間違えがあったとしても、細かい間違えは指摘しない、という方針とのことであり、学生に英語に親しんでもらうための工夫が感じられた。学生主体の授業は、大学院生での専門科目の講義ではあり得るかと思っていたが、学部１、２年生の授業で導入され、機能していることはとても新鮮であり、授業の進め方に対する自身の考えの幅が広がったことを実感している。また、提出課題（reaction paper）の様式には、氏名の記述欄が裏面に設けられており、採点に影響を及ぼさないための工夫との先生の説明に合点がいった。名前を見ると先入観をもって採点してしまうこともあるが、この方法はフェアに採点するために有効である。今後の試験などで取り入れてみたい。（農学・助教）

【授業参観を実施してみて（ダニエル・アイコースト先生より）】

授業参観に来ていただくのはウェルカムです。いつ来ていただいてもかまいません。自分の中に明確なポリシーがあり、自分が開発した方法で授業を行っているので、すべての要素についての質問に答えられる自信がありますし、参観されることも怖いとは思いません。高校教員の資格を取る時に授業参観は何度も経験していて免疫もあるからか、まったく負担には感じません。

ただし、私の授業は教員主導ではないため、授業中の教員の様子を観察しようと思って来る人にとっては、「何もしていないじゃないか」という感想を持つかもしれない内容です。なので、この授業で用いられているPDRメソッドについて、参観者には知っておいてもらいたいと思っています。また、大学によって初修外国語のカリキュラムが異なっているので、他大学からの参観者を受け入れるときには、事前に共通理解をはかっておく必要があると感じています。

参観の際には、実際に学生に交じってディスカッションを体験してもらっていますが、学生と同じ立場で参加する人もいれば、教員のような立場で参加している人もいて、見ていて興味深いです。

参観後のディスカッションでは、興味深い質問が出てくるので面白いです。みなさん、私の授業方法について衝撃を受けている様子が印象的です。その衝撃を受けている姿に私自身が驚いてしまうこともあります。質問が集まるのは予習に用いているプレパレーションワークシートについてです。この予習をきちんとしてくれば、学生は授業中のディスカッションを有意義に進められます。やってくる意味のある課題を出して、それに取り組む動機づけをしっかり行うことが大切なのです。参観者のみなさんは、「学生がこんなにもしっかり宿題をやってくるのか！」と驚いていますが、私にとっては、これは「当たり前」の姿なのです。

〔授業名〕 **英語 B2「General Exercises in English (Communication)」**

〔授業者〕 トッド・エンスレン（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 講師）

〔科目群〕 全学教育科目 共通科目―英語 〔対象〕 工等 1年次後期

〔授業の目的と概要〕

This course aims to improve students' ability to communicate and express their thoughts in English, through various activities involving listening, writing, speaking, and so on.

The objectives of this course are to have students:

1. utilize and expand their English vocabulary
2. think critically about assigned topics for discussion
3. develop their English listening and discussion ability
4. develop their English essay and paragraph writing ability

〔授業の到達目標〕

Students will develop the ability to listen to and comprehend English and/or make themselves understood in English that is necessary in academic and other settings.

Students will be able to:

1. develop their thinking and knowledge through doing preparation for discussions
2. use and expand their current English vocabulary through doing discussions and casual speaking
3. write a well organized reaction following a discussion in paragraph form in 15 minutes

〔授業内容・方法と進度予定〕

1. Discussions about an assigned topic in groups of 3-4 students
   Discussions will be based on written articles and videos available on the Internet. Students will do written preparation about a topic, discuss the topic with other students in class, and write a concluding reaction about the topic including what they learned from other students.
2. Supplementary activities
   Students are expected to come to class on time, be prepared for the class and participate positively.

第1回 Orientation/Supplementary Activity 1
第2回 Discussion 1
第3回 Discussion 2
第4回 Discussion 3
第5回 Discussion 4
第6回 Supplementary Activity 2
第7回 Discussion 5
第8回 Discussion 6
第9回 Discussion 7
第10回 Supplementary Activity 3
第11回 Discussion 8
第12回 Discussion 9
第13回 Discussion 10
第14回 Discussion 11
第15回 Final Activity

〔成績評価方法〕

Assessment criteria: Grade AA is given to the top 10% of students and Grade A is given to the next good 20%. Attendance; Discussions: written preparation, oral participation, written reaction; Supplementary activities; TOEFL-ITP(30%)

〔授業時間外学習〕

Students will watch videos about a topic, think about the topic, and write their answers to questions about the videos and topic as preparation to discuss the topic.

【この授業の特徴】

この授業は、いわゆる反転授業のかたちで行われ、PDR メソッド（p.57参照）が用いられています。学部一年生向けの必修の英語の授業で、受講生は20 ～ 30人です。初回の授業時に多様なトピックの候補が提示され、学生の投票によって選ばれた10のトピックが以降の授業で扱われます。それぞれのトピックに関する英語の記事がオンラインで提供され、学生はそれを読んでプレパレーションワークシートと呼ばれる予習課題に取り組んだうえで授業に参加します。授業中には、この予習に基づくディスカッションが行われます。

【トッド・エンスレン先生から】

専門：応用言語学

PDR メソッドを使った授業では、教員の「講義」はほとんど必要ありません。ディスカッションをしている学生グループの間を動き回り、何が話し合われているかに耳を傾け、必要な支援を提供します。そうしていると、学生の方からディスカッション中に生じた質問が寄せられることもあります。その他には、学生の発話に対して文法上の誤りを正した形で言い直してあげるなどのサポートを行っています。

PDR メソッドを始める前には、文法解説により時間を割くような授業を行っていました。しかし、学生は日常生活で英語を活用する機会をほとんど持っていないことから、授業中に最大限これらの機会を提供することで、これまでに学習してきた英語の知識を行動に変換していくことの方が重要だと意識するようになりました。第二言語習得理論に関する文献においても、「教えられる」よりも、繰り返し「使う」機会にさらされた方が、学習効果が高いことが示されています。これが PDR メソッドの信条でもあるのです。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：参加型

学生主体の授業　まず授業スタイルに驚きました。これまでの自身が受けてきた授業とは全く異なり、衝撃を受けました。これだけ自主性を重んじる、学生主体の授業は見たことがありません。内容としては、スタートから学生達が勝手に動き、小グループを作り自発的に発言し、トッド先生は基本的には見守りというスタイルでしたが、英語の授業の概念が覆るような斬新な授業でした。元来の日本人気質として、自分から動く、話すといった行動は、大多数は苦手で遠慮しがちな事だと思います。しかし、本授業では、英語の従来の文法、座学に重点を置いた内容ではなく、ほとんど会話で終了する形で日本人の弱いところを学習できる素晴らしい形だと思いました。海外からは日本人は英語の記述と朗読はできるけど話せないとよく言われていますが、こういった授業が多くなされればそういったある種の偏見も変わってくるのではないかと感じました。（歯学・助教）

教員の役割　英語の講義に久しぶりに参加した。授業の組み立てがとても良いと思った。こんな英語の授業を受けたかった…。なぜか。非常に実践的で、役立つ教育だと思ったからである。“受験のための英語”ではなく、言語、ツールとして役立つかは、普遍的価値を与えるかであり、学として重要なことであると思った。教員に“動き”があることがやはり効果的であると思った。教員と個々との対話、グループとの対話があった。学び合う場という雰囲気を生み出してくれていた。トッド先生が学生の名前を呼んでコミュニケーションをとっていたのも、良いなと思った。コミュニケーションは学びを深めるということのひとつのように思った。グループワーク中のファシリテートの役割も重要である。各グループのディスカッションが深まるように全体への目を配る必要があった。教育とは「テーマについて、学生とともに学び、深め合うプロセス」であると思う。そのために教員は、引き出す、補うといった役割を担っている。教えるではなく、共に学び、育ちあうということだろう。静的ではなく、非常に動きのあるプロセスである。コミュニケーションは、

日常一般だけでなく、教育にも重要な意味をもつことが理解できた。実践に役立つことと学としての知識を形成することの両立も大事である。教育を受けても使えない普遍性のない英語では何の意味も成さない。そこには論理性、実用性が必要である。（医学・大学院生）

学生主導のディスカッション　実際ディスカッションが始まって、学生の様子を見ていると、手際よくリーダーがメンバーを仕切ってスムーズに意見交換をさせていた。もともとの語学力がよいというのもあるだろうが、学期の最初にモデルディスカッションをひととおり練習させているという準備活動がしっかりしていることが大きな要因だということがわかった。英語力が低めのクラスではどうしたらよいかと質問したが、やはり準備は重要であることと、ディスカッションのための質問の内容をより個人的な経験に基づくものにするとよいのではないかとのご助言をいただいた。確かにそちらのほうが話しやすいかもしれないと思った。また、宿題としてビデオを見てくることにするよりも、何かの記事を読ませたほうが敷居が低いかもしれないともお話いただいた。確かにビデオをみるというのは物によっては非常に難しいかもしれない。読み物だと自分のペースで読めるのでフラストレーションがたまらないかもしれないと思った。（英語教育学・准教授）

授業と授業外学習の一貫した流れ　クラスでは Productive な実践練習、家庭では Receptive な準備学習、というように一貫した流れを作っていたことが参考になった。準備学習をやってきたかをチェックして、やってきた者にはスタンプを押して評価するという学生のやる気を促進するような工夫も見られた。また、クラスでの実践練習ではグループを頻繁に変えて、たくさんの人と話す機会を与えているところや、ネームタグを付けさせて、お互いの名前を呼び合いながら、教師も学生の名前を呼びながら信頼関係を構築しているところもよいと思った。ネームタグを付けるクラスというのは多分あまりないだろうから、「英語の授業」と気分を変えるためにもよいかもしれないと思った。（英語教育学・准教授）

授業外学習への動機づけ　授業以外でさらに驚きだったのは課外学習の達成度です。事前に宿題として毎回課題が与えられているようですが、出席の学生全員がプリント用紙いっぱいに記述してきていました。やらされているという雰囲気ではなく、自ら進んで宿題を遂行しているような印象を受け、高いモチベーションをそれぞれが持っているようでそこも素晴らしいと思いました。授業態度や課外活動への取り組みなど動機付けやモチベーションの維持の仕方は、学生のタイプや元々このクラスを希望して受講しているかにもよりますが、自分ならどのように引き上げていくかが今後の課題となりました。基本的には文法やテスト解答スタイルの講義は中学・高校で多く行われていますので、大学の授業としては今回のようなスタイルは非常にいい切り口だと思いますし、どんどん広がっていけばいいなあと思いました。自分が学生であれば是非受講したいと思いました。ただ、現在のスタイルに持って行くには試行錯誤を繰り返されたとのことで学生の反応を見ながら授業をアレンジしていく重要性を学べました。自分が今後講義を受け持つことがあれば、ただ先生が話すような一本調子でなく学生が発言できる、発言させるような講義を心がけたいと実感しました。（歯学・助教）

【授業参観を実施してみて（トッド・エンスレン先生より）】

もともと自分の授業を参観されるのは好きではありませんでした。自分の行いが審査されているようで、あまり良い気持ちがしないと思っていたからです。でも、この取組みでの授業参観は違いました。私の授業がよい／わるいと評価されるのではなくて、参観者に授業を見てもらって、なぜ私がこのような方法を取っているのかを説明し、参観者のこれからの授業実践の参考にしてもらうという意義があることに気づきました。こちら側が評価されるのではなく、教授学習に関するアイデアを共有する機会だととらえています。

もちろん、参観に来てくれた方々が、私と全く同じように授業を行うということはないと思いますが、それぞれの方の授業実践において、参考にしたりヒントになるような何かを私の授業参観を通して得てくれたらうれしいです。

参観者と授業後にディスカッションする機会は特に楽しんでいます。私の授業において、何を、なぜこのようにやっているのか、ということについて深く考える機会になりますし、これによって私自身の教育観を言語化することができていると感じています。

私も教員になって20年以上経ち、若手教員のみなさんがあまり考えたことのないような教授スタイルの授業を参観してもらえる機会を提供できていると思います。授業参観を通して若手教員のみなさんの手助けをすることで、私自身も、自分の授業方法をより深く理解することができていますし、自分の教育観、教育哲学をふり返るよい機会になっています。

〔授業名〕 **基礎中国語Ⅱ「中国語初級」**

〔授業者〕 趙 秀敏（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 講師）

〔科目群〕 全学教育科目 共通科目―中国語 〔対象〕 文教 1年次後期

〔授業の目的と概要〕

中国の文化に触れながら、引き続いて基礎的な文法、読み書きおよび簡単な会話を学ぶ。

〔授業の到達目標〕

中国語の発音に慣れることと、読解力およびコミュニケーション能力をさらに高めることを目標とする。

〔授業内容・方法と進度予定〕

この授業では、Web 教材を利用した復習と連携し、4技能（聴く、話す、読む、書く）のバランスをとりながら、中国語の基本的な単語や文型を習得し、実践的なコミュニケーション能力を身につける。

第1回 第5課：横浜に行こう（日常行動）〔前半〕
第2回 同上〔後半〕
第3回 第6課：いい曲ですね（得意なこと）〔前半〕
第4回 同上〔後半〕
第5回 第7課：山中君、バイクで怪我をする（体調）〔前半〕
第6回 同上〔後半〕
第7回 第8課：夏合宿の計画（希望・可能）
第8回 ユニット2のまとめ：林林の日記（日記）
第9回 第9課：ぼくたちは絶対に成功できる！（大学生活）〔前半〕
第10回 同上〔後半〕
第11回 第10課：スカイツリーを見に行こう！（誘い・比較）〔前半〕
第12回 同上〔後半〕
第13回 第11課：ホワイトクリスマスね（天候）
第14回 第12課：道中ご無事で（別れ）
第15回 ユニット3のまとめ：山中君のeメール（eメール）

〔教科書および参考書〕

(1) 『中国語の ToBiRa』趙秀敏・富田昇（2013）朝日出版社，教科書

〔成績評価方法〕

復習課題（30%）、小テスト（30%）、期末試験（40%）。試験を受けるためには、全体の3分の2以上の出席を要する。

〔授業時間外学習〕

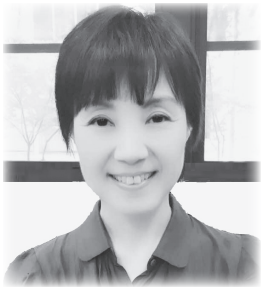
外国語をマスターするためには、授業時間外も積極的に触れなければならない。週平均3時間を目安に、それぞれ授業の担当教員の指示に従って宿題をやるなど、予習・復習を行うことを要求する。

【この授業の特徴】

本授業は学部一年生向けの初修外国語としての中国語の授業で、受講生は40名程度です。授業後の復習課題がｅラーニングとして提供されており、教員はこの実施率や誤答の傾向などを考慮しながら以降の授業実践でのフィードバックを行っています。中国からの留学生がTAをつとめており、授業の中頃には、このTAによる中国文化の紹介も織り込まれています。授業参観では、参観者は教室後方から授業の様子を観察しました。

【趙秀敏先生から】

専門：中国語教育、教育工学



本授業では、ICT(情報通信技術)を活用した、インストラクショナルデザイン理論に基づくブレンディッドラーニングを提案しています。即ち、マルティメディアによる対面授業、PCやスマホ利用の授業後ｅラーニング、及び次回授業の冒頭に行う確認小テストと会話発展学習からなる3段階学習プロセスの実践です。これにより、学習者に体系的な学習内容を提供するとともに、従来の授業では困難であった音声面重視のトレーニングやコミュニケーション言語活動を可能にすることができました。また、5分間ほどのリフレッシュタイムを設け、歌や音楽、伝統行事、料理などのトピックから、中国文化を多面的に紹介することで、学習者に気分転換させると同時に中国語学習への動機づけを高めています。さらに、授業後ｅラーニング及び次回授業での確認小テストを成績評価の対象とする評価方法により、授業時間外自習の継続、日常化のための外発的動機づけとしています。

【参観者の学び・気づき】　参観の形式：観察型

授業の雰囲気　このようなボリュームがある、かつ時間の余裕を持つ90分の授業は、私にとっては憧れの中国語授業の様子である。趙先生はよく学生の名前を覚えていて、しかも中国語の読み方で呼んで、学生に聞かせていた。授業全体の雰囲気は非常に良いと感じた。また、授業中、学生の返事や回答をもらう度に、趙先生はよく「很好, 很好」「加油, 加油」などの肯定的な言葉、励ましの言葉を用いてコミュニケーションをとっていた。これらの行動は授業がスムーズに行われる潤滑油であると思う。（言語学・大学院生）

初修外国語学習上の工夫　テキストの執筆者が担当教員であり、中国語学習における指針がテキストと授業において連携できている授業だと思う。一つの単元に二回の授業時間を当てるということだが、授業中には一つの状況に集中した会話を反復することによって高い学習効果が期待できる。また、会話の学習において、映像・音声教材の視聴→リピート→シャドーイング→ロールプレイング→ペア練習→全員発話の順で繰り返し発話・聴取することは良い学習方法だと考えられる。さらに、ボールなどの小道具を使用することによって遊び感覚で授業に参加できるのもメリットであると感じた。私自身も語学学習を経験しているが、勉強だと思うと意欲が低下したことがしばしばある。語学学習は「言語として感じること」が楽しいと思うが、これはとりわけ教養の第二外国語にはより当てはまると実感した。（宗教学・大学院生）

導入の工夫と声がけ　授業開始のベルが鳴ったら、すぐ本文に入るのではないかと思いきや、趙先生がまず今日の勉強の概要を学生と一緒に閲覧したり読んだりしました。これによって、学生たちはこれから勉強する内容に対して、まだあまり理解できていないかもしれませんが、大体のイメージを付けることができるようになり、大変役に立つと考えられます。授業に入り、趙先生が積極的に中国語でみなさんに話しかけたり、質問したりして、巧みに学生たちとの交流をはかっていました。私は普

段、初級学習者への配慮もあり、授業をする時には基本的には日本語でしゃべり中国語の使用を控えていました。しかし、趙先生の授業を見ると、多少聞き取れなかったとしても学生たちは実は母語話者の教員の発音を聞きたかったのではないかと思い始め、母語話者の教員の長所が何にあるかということをもう一度考える必要があると感じました。また、私は自分の専攻の影響で、授業をする時に文法や一つ一つの細かいところに拘り過ぎる傾向があると思いますが、趙先生とのディスカションを通して、各段階の学習者のニーズに応じて授業を展開していかないといけないということを意識しました。今後より豊富多彩な形式を採用し学生たちとコミュニケーションを取りながら授業の内容を修正していきたいと思います。（言語学・研究員）

授業の時間配分　第一に、教員による講義が約30分間行われ、第二に、25分ほどTAによる中国文化の紹介があった。第三に、学生主導の寸劇の披露と評価、第四に問題解説と文章の朗読があった。全体として良いと感じたのは、教員による指導、TAの活動、学生の参加がバランスよく行われたことである。特に寸劇の評価に三者（教員、TA、学生）が参加していたことは印象的だった。評価基準が明確に提示されているので学生も納得するだろう。授業によっては教員が一方的に情報を伝えることもあるが、今回は参加者全員が積極的に活動する授業であったと思われる。教員とTAの情報伝達において、映像、写真、絵、音声教材、口頭説明が用いられ大変わかりやすかった。（宗教学・大学院生）

３段階の学習プロセス　趙先生は、１課の授業内容を３段階で行っている。「先週の授業の後半＋課題」「今週の授業の前半＋課題」「来週授業の前半テスト＋新しい授業内容」、要するに１課の授業は学生に「授業―自宅―授業―テスト」というやり方で繰り返して勉強させる空間・時間を与えている。学生は大量の授業外時間を使う必要がなく、効率的に中国語授業で学ぶ知識を身につけられるため、私は合理的かつ理想的なやり方だと感じた。そして、趙先生は学生の集中力を引き上げるため、

90分の授業中に大体15分単位で一つの「授業活動」を変え、学生の主導性を活かしながらコミュニケーションをとる工夫をしている。この点も大変参考になるポイントである。今後、自分が中国語の授業を担当するとき、実践してみたいと思う。（言語学・大学院生）

授業外学習との調和　趙先生は、所用時間おおよそ15分を想定した授業外活動を学生に課していた。またこの成果や結果を活かした授業内活動をおこなっていた。このような取り組み方は、学生も負担に感じていないようであり、授業内活動と連携することによって学習の質と量を高めていると思う。（宗教学・大学院生）

授業中の小休憩の工夫　授業の途中で、一休みの時間を設けて中国語の歌を紹介していたが、これはとても良いと思った。ただ休憩時間を設けるのではなく、紹介する歌の歌詞、説明、バージョンの選定まで、決して適当ではなく、よく考えて教材を選択していて、教師の熱意を感じた。このように学生の学習意欲を維持する工夫は大事で、今後もそれに関する技の勉強に精を出す必要性があると思った。（文学・研究員）

【授業参観を実施してみて】

授業参観の依頼を受けた時には、うれしい反面、正直なところ「仕事が増えちゃったな」と思いました。でも、自分の授業を提供することが若手教員の方々のお役にたつのなら、という思いでお引き受けしました。終わってみれば、それほど負担のかかるものではなかったのですが、やる前には「授業参観がくるな」ということは、ちょっと気にかかることとして頭の中にあるような状況でした。

初めてお受けした昨年は、私も緊張して硬くなってしまい、それが学生に伝わったのか、学生も授業参観の日はちょっと硬い印象を受けました。２年目の今年は、私もちょっと慣れてきて普段通りに授業を行うことができたので、学生も普段と同じパフォーマンスを発揮してくれました。そういう意味で、授業参観による学生への負の影響は全くなかったと思います。

授業後のディスカッションで参観者の方々とお話ができることで、みなさんが何を思ったのか、何を考えているのか、みなさんの教育観を知ることができます。この機会がないと、私が一方的に授業を見せるだけの取組みになってしまいます。私の授業には、特に語学教員を目指している方々が参観に来ることが多いので、将来のご自身の職業に直結するような認識、知識、理論、価値観などを議論できることは、とても意義のあることだと思っています。もちろん、他の分野の方々に参観に来ていただくこともうれしいです。様々な授業の見方、多様な考え方に触れられる貴重な機会だと思っています。

受講生以外の方に授業を見てもらうことで、気が引き締まりますし、授業設計を見直す機会にもなります。丁寧に授業を準備しようという気持ちになることによって、自分がより成長する機会になっていると思います。また、他の授業参観に私も参加させてもらったのですが、他の先生方の実践を見て、様々な工夫のあり方を実際に知ることができたのは、貴重な経験でした。